

日本アジア振興財団（J A P F）

2014 年夏期インターンシップ論文集

期間： 第一陣：2014 年 8 月 23 日（土）～9 月 3 日（水）

第二陣：2014 年 8 月 30 日（土）～9 月 11 日（水）

第三陣：2014 年 9 月 6 日（土）～9 月 17 日（水）

対象国：タイ王国、カンボジア王国、ベトナム社会主義共和国

参加人数：第一陣：23 名・第二陣：11 名・第三陣 13 名

男女割合：男 13 名、女 34 名

日本国籍者：47 名

日本以外の国籍者：1 名（中国国籍）

参加大学：関西学院大学、近畿大学、神戸女学院大学、同志社大学専修大学、
京都女子大学、神戸市外国語大学、大阪府立大学、京都大学学院、
京都大学、兵庫県立大学、立命館大学、神戸大学、金沢工業大学、
東京学芸大学、青山学院大学、日本大学、法政大学、共立女子短期
大学、慶應義塾大学、筑波大学、東京工芸大学、信州大学、恵泉女
学園大学、北里大学、福岡大学、久留米大学、福岡女学院大学

カンボジア・ベトナムスタディツアーに参加して
専修大学 法学部 3 年生 第一陣

12 日間、カンボジアとベトナムへ行ってきた。滞在したのは、たったの 12 日間だったけれども、初めての場所、初めての経験、人との出会い、毎日が刺激的で一生忘れられない 12 日間になった。

私がこの旅で印象に残ったのは、カンボジアの国の人々の笑顔だ。街や村を歩いていて目が合うと、必ずといっていいほどみんなが微笑みかけてくれたし、話かけてくれたりもした。日本ではこんなことはない。そして孤児院を訪問したときは子ども達の元気の良さに非常に驚いた。みんな親を亡くしていたり、私達が考えられないようなひどい経験をしてきたはずなのに、笑顔がまぶしくて、目はキラキラしていて、元気で、夢を持って勉強していて、ここの国の人々の生きる力の強さを感じた。日本は確かに恵まれている。カンボジアは、インフラ整備がまだまだだし、貧困の差が激しいし、衛生面も良いとは言えなかった。しかし、お金があって豊かな暮らしをすることだけが幸せではないのだとこの旅で気づくことができた。今を一生懸命笑顔で生きること。このことがどんなに幸せなことなのか気づくことができて本当によかった。

また、戦争や虐殺のことも印象に残っている。「もう二度と戦争をしてはいけない」とこんなに強く心から思ったのは初めてだった。実際の写真、実際に使われたモノ、戦争を体験した方の貴重なお話。戦争がこんなに残酷で悲惨なものだとは思っていなかった。自分の無知さに恥ずかしくなった。私は何も知らなかった。軽々しく「戦争をしてはいけない」と思っていた。日本という平和な国の中でこれまで不自由なく育って、特に戦争や生きるということについて真剣に考えてこなかった。だけどこれからは違う。もっとカンボジアだけでなく世界を知って、戦争や生きることについて考え、向き合っていきたいと思った。この旅で様々な国があって人がいて、そこには様々な暮らしがあって、様々な歴史があるということを学ぶことができた。このことは私にとって大きな収穫になった。

そして最後に、この旅で最高の仲間と出会うことができた。全国各地から集まって、みんな違うことを大学で専攻していて、みんな考え方が違う。ディスカッションをするたびに「こんな考え方もあるのか」と勉強になった。この仲間とは、これからもずっと繋がってほしい。一緒に学ぶことができてよかった。みんなありがとう。出会いに感謝。

この旅では、自分がちっぽけな存在であること、勉強不足であることに気づくことができた、ほんの少しだけだが、世界の一部分を知ることができた。この経験を無駄にせず、将来に生かしていきたい。刺激的な 12 日間をありがとうございました！！

インターンシップを終えて

東京学芸大学 K類アジア研究専攻 1年生 第一陣

私が今回カンボジア、ベトナムに行く以前に抱いていたこの2国に対する印象は、貧しい国、かわいそうな国、といったものだった。しかしこの印象はベトナムに到着した初日に誤ったものであったと実感した。

ベトナムの街は想像以上に活気づいていた。街を歩く若者やデパートなどの様子を見ると日本とそれほど差はないように感じた。また、ベトナム戦争の被害から立ち直ったベトナムの強さを感じた。今回はベトナムの都市部のみの滞在で郊外に行くことはできなかった。もしかしたら郊外にはまだまだ大きな問題が残っているのかもしれない。またベトナムを訪れ、郊外の状況を自分の目で確かめて見たいと思う。

カンボジアはやはり貧しい国であった。街にあふれるごみの様子やトイレの様子、物乞いをする人々を見れば一目瞭然だった。以前から話には聞いていたが実際に目にすると日本とのあまりのギャップに驚いた。しかしカンボジアはけっして“かわいそうな国”ではなかった。家族みんなで一つのバイクに乗って出かけていく姿、裸足で外を走り回っている子供たちの姿を見ているとむしろ幸せな国であるように感じた。日本を基準として他国を評価するようなことは価値観を押し付けるようなものであり、また人から聞いた話やテレビや新聞などメディアを通して語られることをうのみにするようなステレオタイプになってしまうことはよくない。自分の目で見て、自分の頭で考えて判断することが大切である。

しかし、まだまだ改善すべき点はたくさんある。特にカンボジアは衛生面、インフラ、教育面など課題は山積みである。また、旧ポルポト政権の影響もあって、他国の支援に頼らざるを得ないのが現実である。しかし他国に頼ってばかりでは植民地状態と同じであると思う。カンボジアの人々は自国の問題は自分たちで解決しようというようなプライドを持つ必要があるのではないかと感じた。問題解決にはリーダーとなる人材が必要だ。日本は同じアジアの国として、また先進国として、カンボジアの人材育成にかかわっていくべきだと思う。

今回のインターンシップを通して、実際に現地に赴き自分の目で見ることでしか得られないことがたくさんあることを実感した。これを皮切りにいろいろな国を訪れ、自分の知らない世界を見てみたいという気持ちが強くなった。今回得た経験と積極性を今後の生活に生かしていきたいと思う。

日本はカンボジアにどのような支援をすべきか

北里大学 海洋生命科学部 2 年生 第一陣

カンボジアは 40 年以上前に起こった内戦によって、多くの人々が亡くなり、土地は荒れた。平和になり、その当時を経験していない人達が増えてきた今でもその時の傷跡は残り続けている。

日本は現在、カンボジアに対して数多くの支援をしている。日本は他にどんなことをしていくべきなのだろうか。

カンボジアでは、ポル・ポト時代の虐殺により知識人と呼べる人達はほとんどいなくなってしまった。ポル・ポト政権の原始共産主義の政策により、社会のシステムそのものが破壊されてしまったのである。その後遺症ともいえる教育や医療・インフラ整備の不足などは今でも続いている。教師・医者・技術者が不足しており、日本や他の国々はカンボジアへ人材の派遣を行っている。また、カンボジアでは国民の名前や住所なども全てを登録できてはおらず、国の資金は海外からの援助に依存している面もある。日本はカンボジアにとっては累計額では最大の援助国であり、約 172 百万ドルの支援をしている。

資金援助に関しては、日本は十分に支援をしているといえる。だが人材派遣には多少の困難が付きまといっている。その一つが現地の人々との価値観の違いである。例えば教育の支援において、現地に自分達の国の教育システムを導入しても、大抵は現地の教師と衝突したり、受け入れてもらえなかったりと成功しない。支援をするにしても相手の望みや考えを理解しなければ、失敗や的外れな支援をすることになってしまう。

また、支援の仕方にも課題は存在している。それはカンボジアの人達が支援を頼り過ぎることがないように支援をしなければならないことである。カンボジアの人達が海外からの支援を過信すれば、いつまでもカンボジアの発展は続かないだろうし、後に大きな悪影響を出しかねないからである。現にカンボジア政府が援助を得るために地雷の除去に消極的であり、支援を得るために孤児院を利用する者がいるなど、すでに問題が生じている場合もある。カンボジアの自立を果たせなければ、支援は意味をなさなくなってしまう。

カンボジアへの支援については、どれだけ時間をかけて根気よく続けられるかが重要である。そうして人々の信頼を得なければ、支援もカンボジアの自立も達成できないだろう。

そもそもあの内戦はカンボジアの独立が目的であった。ポル・ポトだけでなく、アメリカ・ソ連・中国などの大国の思惑があの内戦には関わっているのである。カンボジアはそれを繰り返さぬように知識と自立心をもって国際社会に加わって欲しいと思う。それを助けるために日本は、カンボジアを含む周辺の国々についての理解と知識、自らへの自信を持って、支援を続けていくべきである。

ベトナム・カンボジア インターンシップを終えて
北里大学 獣医学部1年生 第一陣

日本人が海外へ行くとしたら、旅行くらいのもので、海外進出しようという者は少ない。旅行といっても選ばれるのは比較的、発展した国や都市といったところが主である。これは、日本が恵まれすぎているが故であろう。恵まれているが故に、わざわざ日本を出ようとは思わないのだ。私は今回のスタディーツアーでこのことをひしひしと感じた。水道、ガス、電気等のライフラインは整っているし、どんなものを食べても腹をこわさない。どんなものひとつ取り上げても日本で困ることはない。そうした空間で人格を形成してきた私は、常に欲求が満たされ、いつの間にか主体性を失い、心の豊かさなど微塵も無くなっていた。

そんな中、このツアーに参加した。そして、今まで知る由もなかった多くのものを経験した。

歴史的背景もそうだが、私が言うそれは、行かねば決して得られぬ類のものである。孤児院や農村で暮らす子供たちの笑顔。仕事を得るために学校で必死に学を成そうとする生徒たちの眼差し。私がいつの間にか失くしてしまったものを、確かに彼らは持っていた。

先進国と名付けられた我々は、彼らのことを発展途上国と揶揄するが、この表現は決して彼らが我々より劣っているということを内包してはならない。我々の文化のフィルターを通して見れば彼らの生活は劣っているもの、可哀想なものに見えてしまうのも無理はない。しかし、当の彼らの生活している様子を拝見すると、決してその様には見えない。むしろ、我々よりも笑い、話し、楽しそうにしているのだ。経済というもののさしでしか世の中を見れなくなっている我々が、彼らの生活を完璧に理解しようなんて無理だと思う。しかし、我々は異文化理解ができなくとも、異文化誤解だけはしてはならないと切に感じた。

そして、彼らのように学習意欲の高い人々が将来この国を牽引していくのであれば、安心であると感じるのと同時に、勉強したくてもできない人々がたくさんいるという現状に歯痒さを覚えた。私個人としては、勉強とは権利であると同時に、権利獲得の手段である、と考えてきた。何故なら、いかなる権利を主張しようとも、学のない言葉に誰も耳を傾けてなどくれないと考えるからである。故に、この問題は非常に衝撃的であった。

この様に、様々な問題が未だあるようにおもわれるが、こうした問題はその国の国民が最終的に解決させなければならないのだ。目標は山積みのようなのだが、夢を持って進み続けている彼らなら成し遂げられるであろう。また、このツアーを通して私は、今まで自分が見つけられなかった進むべき方向がぼんやりとだが見え始めた。色んなものを見て、今まで迷っていたことがとても小さなものを感じるようになった。そして、何といても“笑顔”の重要性、共通性を再認識できた。なぜなら、彼らの笑顔から私は多くの力を貰った。そして、私たちが笑顔で接したからこそ、彼らも見ず知らずの私たちに笑顔を向けてくれ

たのだろう。私はここで学んだことを学びっぱなしにせず、どう日常生活に生かせるかが最も重要になってくるであろう。

「カンボジアを通して日本を見る」

東京学芸大学 教育学部 3 年生 第一陣

今回私がこのスタディツアーに参加したのは、東南アジアの貧困国の現状を自分の目でみて、将来教員になったときに子どもたちに伝えられるようになりたいと思っていること、現地で日本語を学んでいる人たちの様子を見て、話を聞きたいと思ったことの 2 点が理由です。

参加する前に『僕たちは世界を変えることができない』（映画）を見て、ポルポト政権の被害がどれほどのものだったのか、HIV 病棟、小学校建設のリアルな様子をみて、驚愕し、私がカンボジアに行くことに意味はあるのか、不安になっていました。また、このツアーに参加することを NPO で活動している人に話すと、「何のために行くの？」と聞かれることが多くて、何かをカンボジアのために作ってくるわけでもなく現状をただ見に行くことにこれでいいのかという疑問を感じていたので、自信を持って答えることができない自分がいました。しかし、12 日間のスタディツアーを通して、自信を持って言えること、気付いたことが 2 点あります。

1 点目は、ボランティア、カンボジアを支えるために共通する理念についてです。それは相手の現状、そのバックグラウンドを理解したうえで、最も必要な支援を考える。最終的に彼らが自分たちだけで国を引っ張っていけるような人材育成をする。という理念だと、現地で働く日本人の方々の話から感じました。相互理解し、互いに尊重しあい、相手のニーズにこたえるように働きかける。日本のボランティアもそうあるべきなのに、それに気づかずにエゴでボランティアをしている人たちが、日本には少なくないと思います。ボランティアが偽善だと言われるゆえんと、本当に望ましい形のボランティアをしている人たちもいることの両極について気づきを得ました。

2 点目はカンボジアは貧しくないというとらえ方から自分の価値観の偏りを見つめ直すことができたことです。孤児院に行っても、農園に行っても衣服は満足なものとはいえないし、衛星的にも日本では考えられない状態で生活している、水もまだ清潔ではない井戸水を飲んでいる村もある。それなのにみんな会う人会う人常に笑顔。とても幸せそうな表情でした。街を歩いている物売りの少年少女、物乞いの人は悲しそうな表情を浮かべている一方、こんなに笑顔で寄ってきてくれる人がたくさんいるのも現実で、私は勝手にカンボジアは貧しいと思い込んでいましたが、人々の心は日本人よりも豊かだともいえることに気付きました。そして、その思い込んでいた価値観は、日本目線での視点、自分の経験をもとにした視点であり、いくら自分が多様な視点でものを見ようと日本で心掛けていても、実際に現地に飛び込んでみなければわからなかったことだと思います。

現地を見ることなくして感じるができなかったことがこのほかにもたくさんあります。そしてそれらは、カンボジアのために何かをする一歩になるだけではなく、日本にしながら誰かを、何かを支援するときの大事な観点についても共通するものが多いのです。

カンボジアにしながら日本の自分を見直すことができたツアーでした。
この経験を次の自分のアクションに必ずつなげたいと思います。

カンボジア・ベトナムでの12日間

専修大学 法学部3年生 第一陣

特に初めての海外となると欧州やアメリカ等の英語圏へ行く人が圧倒的に多いのですが、私の場合このインターンシップツアーが初めての海外で、それを話す度に驚かれ、勇気あるねというコメントを頂戴する程度には初海外旅行先としてはメジャーではないのかもしれないですね。

それはさておき、12日間を振り返り印象深いところは多数ありますが、まずはパニャサ大学と日本語学校の教育機関です。

パニャサ大学では悔しいという気持ちが残るもので、事前の打ち合わせで作った資料が無駄になったというのもそうだし、何よりも何年も学んでいるはずの英語でちゃんと抗議できず、結局全てを相手方任せというのが何より悔しい思い出です。

日本語学校では大変ではありました。元気が良く、中々声を張り上げないといけなかったりもしましたが良い所で合いの手を入れてくれたり、私は成田山と東京大神宮を取り上げたのですが、意外にもカンボジアにウナギがいるという事実も知り、それを知った一人がビジネスを企てていたり、とても賑やかで楽しかったです。

CIESF や JICA では何故ここはこうなんだろう？という答えがすべてではありませんが、解明されます。例をあげると、何故カンボジアで教育が語学に偏重しているのか、何故特にシェムリアップ等首都以外では電力供給が不足気味なのか等挙げればきりがありませんが、きちんと分かりますし、特に JICA では様々な資料があって特に国際貢献がしたいと思っている方なら素晴らしい経験になるのではないのでしょうか。

これは私的に考えたことですが信号機にカウントダウン表示は日本にも取り入れるべきだと確信しています。

何故ならばドライバーである私から云わせればあまりに遅いと頭に血が上ってしまう時もあるのであらかじめわかったほうがそういう機会は少なくなると思います。

ちゃんと物売りの方に NO と言ったり、ディスカウントやディスカッションが楽しかったり、少し己にも変化が見られたりしました。

振り返ってみるとゴミ山など多少の予定変更はありましたが、それを差し引いても素晴らしい経験でした。

帰ってきた今、思うことは日本は恵まれているということです。

治安が良く、食の安全が確保出来て、電気も安定的に供給され、インフラも整備され、病院などの施設も充実し、技術力も高く、経済力もそこそこあり、様々な娯楽に溢れていて、伝統もありつつ革新も望める国はそうそうないでしょう。

やはりこのツアーに参加してよかったと思いますし、学ぶものも非常に多かったと思います。

「ターニングポイント」

関西学院大学 文学部 2年生 第一陣

私は今回このインターンシップに参加するにあたって、ある一つの目標を持っていました。それは、何故自分が国際協力に関する仕事に就きたいのか、その理由を見つけることでした。授業でたまたま出会った先輩に教えて頂いて、これだ！と思ったのがきっかけでこのインターンシップに参加し、上記の目標と共に実際に現地へ足を運んで自分の目で見ることで得られたものがいくつもありました。最初に、印象深かった3点について述べた後に、自分なりに見つけた目標に対する答えについてまとめたいと思います。

まず第1に、カンボジアでの支援の現状についてです。今回、いくつかの支援機関を訪問するにあたり、私は本当に有効な支援がなされているのか、半ば半信半疑といった感じの姿勢でいました。というのも大学の講義で支援の問題点などについて学んでいたからです。私が一番重視していたのは、カンボジアが支援に依存していないかどうかということでした。確かに、今回訪問してみてカンボジアは大部分が支援に頼っていることが分かりました。しかしその一方で、支援機関の支援方法が「魚の釣り方を教える」アプローチであり、さらにカンボジアの価値観を尊重したものであることに感動しました。勿論私が見たものはごく一部であり、現地のニーズに見合っていない支援をする団体もまだ沢山あるとは思いますが、しかし、JICAで伺ったお話によると、現在カンボジアは無償資金協力から円借款への移行が進んでいるということで、持続的な発展を見越した支援の成果が徐々にでも出てきているのではないかとということが感じられました。

第2に、私は現地の若い方と交流し、大変刺激を受けました。彼らは大変志が高く、これからこの国を自分たちがリードしていくのだという気概に溢れているように感じられました。特に印象深かったのは日本語学校の教師をされている男性でした。今カンボジアでは教師の給料が低く、副業をしなければ家族は養えないような状況です。しかし彼は、例えば給料が低くても母国が自立出来るように教師として国に恩返しをしたい、と流暢な日本語で語っていました。このような若者を見ると、やはり発展には人材というものが欠かせない要素だと改めて考えさせられました。同時に、グローバル化が進む現在、自分がこのような優秀な若者たちと肩を並べて仕事をするのかもしれないと思うと、気が引き締まりました。

第3に、カンボジアの人々の幸せそうな様子についてです。カンボジアは今、インフラや衛生面など課題は沢山あるとは思いますが、しかしのどかに時間が流れる農村や、家は狭くても身を寄せ合って幸せそうに食卓を囲む家族を見ていると、この光景は変わってほしくないという風に強く思いました。日本は発展しました。幸せな人もいる一方で沢山の自殺者がいるという現実もあります。何を残すのか、何を变えるのか、変えることでヒトやモノがどう影響されてしまうのか、当たり前ですが支援にあたって慎重に考えるべきことだと思いました。変えることだけが支援なのではないということだと思っています。カンボジ

アで生きている人々を実際に見て、彼らは物的な貧しさはあれども、心は豊かでした。彼らの人懐っこい笑顔は変わって欲しくないと、切に思いました。

では最後に、私がこのインターンシップの目標に対して自分がどのような答えを出したのか、まとめたいと思います。ふと私は帰りの飛行機で自分のパスポートの「日本国旅券」という文字を眺めていて、当たり前ではありますが改めて自分が日本人であるということを感じ知った気がしました。これは初めての感覚で、外の世界から日本を見て得られたものだと思っています。まだまだ世界では高等教育を受けられない人が多い中、当たり前のように大学に行き、学ぶ自分。日本という国に生まれて、自分がなすべきことは何なのかということを考えると、得た知識を他の人々の役に立てることなのではないかと思いました。しかし私はまだ何かをしたいという気持ちだけが先走り、何がしたいのかも具体的に決めていませんでした。しかも自分には絶対他の人には負けない、というようなものもなく、自分に出来ることなんて皆無だと思いました。これは自分に向き合ってみて気付かされたことでした。この様に課題も沢山見つかりました。

今回このインターンシップに参加し、机の上で学んだことをリアルに目の前にすることで2国を肌で感じる事が出来、自分にとって大変有意義な体験でした。自分の中で国際協力に関する仕事がしたいという気持ちもより強くなりました。しかし、時間が経つにつれて自分の中の何かが薄れてしまってまた自分には何も出来ない、と弱気になってまた揺らいでいるのもまた事実です。今回のこの経験を心に留めて、ブラッシュアップするためにも常に自分が刺激を受け、考えさせられるような環境に身を置きたいと思います。この経験は自分の進むべき道となる「線」を繋いでいく一つ「点」になりました。このような機会を与えて下さった全ての方々に改めて感謝したいと思います。ありがとうございました。

インターンシップを終えて

京都女子大学 家政学部生活福祉学科 2 年生 第一陣

わたしは子どもを中心とする環境や家庭、教育、それらを含む福祉に興味があります。日本の子どもだけでなく、世界の子どもたちを知りたい、見たい、関わりたい、という思いがあり、今回のツアーに参加することを決めました。

この 12 日間は今まで経験したことのないことの連続でした。生活環境や関わる人が丸々変わったことはもちろん、今まで考えなかったようなことを考えるようになったり、自分の中でほぼ完成していた考えや思いに改めて疑問を持ったり、目に見えてわかる動きだけでなく頭の中も活発に動いていました。それらは、全て経験からなるものであり、外発的な経験が内発的な変化を生んだのだと思います。このツアーに参加し、自分の中にある疑問や問題は圧倒的に増えました。加えて、元々持っていた疑問や問題は更に複雑化したように思えます。それは、それらが単調なものだと勘違いしていたからだと思います。今までは見えなかった疑問や問題が見えるようになった理由はふたつあります。第一に一番大きな理由は、実際に現状を自分の目で確かめたからです。イメージの中のものを実際のものは大きく異なりました。知っているものの中でしか考えることができないのだと実感しました。第二に、教育・文化・医療・経済・社会・農業・平和の分野について包括的な研修先に訪れることができる JAPF のプログラムがわたしの視野を広げてくれたからです。わたしはツアーに参加する前は教育分野に特化した海外のボランティアや研修を探しており、今回のツアーはわたしにとって理想的な選択ではありませんでした。実際に研修先を訪れるまで子どもが関係する分野以外にはあまり興味がありませんでした。どの分野も子どもに間接的に関係があると頭では理解していても、直接的なものではないので影響が少ないと考えていたからだと思います。しかし、研修先を訪れてみると、歴史や文化、環境は子どもたちの現状の基盤となるものとひしひしと感じ、全てのことは関わり合っていると実感しました。わたしが特別に興味のある分野以外にも目を向けさせ、視野を広げることで以前は見えなかった、もしくは重要だと考えていなかったものを意識することができるようになりました。このようなふたつの点から、ツアー前より疑問や問題が増え、複雑化しましたが、それは以前より疑問や問題の核心に近づいた証拠だと思います。そして、これらはこれからも考え続けたいと思います。

このツアーを終えて、考え続けること以外に継続してやらなければならないと思ったことのひとつに英語を中心とする言語の習得があります。現地の人とのコミュニケーションのほとんどは英語でした。わたしはこのツアーで英語が話せる人と話すことができない人では吸収することができた量の差があったと思います。コミュニケーションは共通の言語を使用することだけだとは思いませんが、共通の言語を使用することでコミュニケーションの困難さが解消され、比較的簡単に関係を構築することができるということを目の当たりにしました。わたしは英語が話せません。それでもこのツアーではきっとどうにかなる

だろうと思って参加しました。実際、「どうにか」になりました。わたしはツアーに参加する前、「どうにか」でいいと思っていたのです。しかし今のわたしは「どうにか」では満足していません。彼らに聞きたいことも自分の言いたいこともまだありました。彼らの意見を吸収したかったです。感情の意思疎通を超えるには言語が必要であると気づき、そしてわたしもその感情の意思疎通を超えたいとようやく思えることができました。

JAPF のスタディツアーに参加することができて本当に良かったと感じています。これを期に自分に課した課題を継続して取り組むことで自分を更に成長させようと思います。貴重な体験の場を与えてくださり、大変感謝しています。

インターンを終えて

京都女子大学 文学部 2 年生 第一陣

今までいくつかの国に行った経験がありましたが、東南アジアは初めてでした。私は単純にアンコール・ワットに行きたくて、ついでに色々学べたらラッキーだな、程度の軽い気持ちで参加したのですが、結果は予想以上。普通のツアーじゃ行かないような場所に行き、貴重な経験をすることができました。日本では多くの団体がカンボジアに対して支援を行っていますが、現地で実際に支援を行っている方々から生のお話を聞ける機会は早々ないと思います。体力的にハードで体調を崩したりもしましたが、本当に濃い 12 日間でした。

私にとって、色んな立場の、色んな考えを持った人々と話すことができた、というのが今回のツアーでの一番の収穫であったように思えます。カンボジアに対して何の支援ができるか考えた時の CIESF と JICA の取り組みや、孤児院や一般の大学生や TAYAMA の学生たちとの交流のおかげで偏っていた視点から、もっと客観的に冷静に広い視点から物事を見つめられるようになりました。一見穴のない支援策にあわや完全に回し者になりかけていたら、夜のディスカッションでみんなの意見を聞いて、そういう視点もあるのか！と現実に引き戻された、あの時の衝撃が忘れられません。メディアを通してじゃなくて実際にこの目で見たカンボジアの人々は、とても生き生きとしているように見えました。どこか楽しそうで、笑顔で、幸せそうに見えました。価値観の違い、という言葉が何度ツアー中頭に浮かんだか分かりません。日本人が勝手に憐れんでいるだけなのかもしれない。もちろん色んな立場の人がいて、現状に満足せずもっと高みを目指している人もいました。でも日本人が考えている幸せが、彼らの幸せと一致するとは限らないのは確かで、価値観の押しつけは本当によくないと感じました。我々にできることは何か、もっとよく考えてみる必要があると思います。また、向こうの人たちの積極性にも驚かされました。とにかくグイグイくる、ぶつかってくる。ハングリー精神とでもいえばいいのか、その姿勢が見て取れました。とりあえず全力、の一言で、そこが日本とは違うように思うようになりました。挙手することを恥ずかしいと思う自分が情けないです。真っ直ぐに生きている人たちを見て、私は自分で自分の世界を生きにくくしてるんじゃないかと思いました。もっと単純でいい、大事なのは意思であり、どれだけ周りに伝えられるか、が鍵だと思います。

ディスカッションで得られたものも大きいです。色んな意見を聞けました、同じものを見たのにみんなバラバラでした。改善策を模索するなかで何度も詰まりましたが、それでも頭を絞ってみんなでどうにかしようと熱くなっていました。結論も改善策もわからないまま終わった日もあって、自分の知識不足と無力さを実感しました。討論しているとどうしてもカンボジア政府の制度がどうなっているのか、本当はこの国の人たちはどうなりたいたのか疑問に思ってしまった。毎回毎回ディスカッションのメンバーに恵まれて、貴重な意見交換ができたことを嬉しく思います。

インターンが終わって、このまま元の生活に戻るけど、得たものをしっかり前に出していきたいです。それは絶対に私の強みになると確信しています。このインターンに参加して本当によかったです。学んだことは決して忘れません。スタッフの方、一緒に行ったメンバーの方、みなさん本当にありがとうございました。

海外インターンシップに参加して
京都女子大学 文学部 3 年生 第一陣

以前から海外に行くことが好きであった。ヨーロッパ、オーストラリアなどには行ったことがあったがアジアには行ったことがなかった。元々アジアには興味があり、いつか行ってみたいという願望があった。また、私は、将来、どのような方向に進むのかと全く決めておらず、今後どのようにしたいのか。どのように自分が成長したいのかという思いがあったため、参加したら何か自身の中で変わるのではないのかという思いで、このインターンシップに参加した。

実際にベトナム・カンボジアに到着した時の両国の第一印象はあまり良くなかった。衛生面は汚く、インフラも整備されていない、治安も思った以上に悪い。ほうとうにこの国でインターンシップを無事に過ごすことが出来るのか。言語も全く理解できなかったのも最後まで乗り越えることが出来るのかという不安がある中で、クチトンネルに訪れた。クチトンネルではベトナム戦争の歴史、ゲリラ軍の恐ろしさ、戦場でどのように生きていくのかなど様々なことを学ぶことができた。さらに、実際の実弾を使用した銃体験では、引き金を引く人差し指が重かったことを今でも覚えている。この人差し指に人の命がかかっていると思うと、引くに引けなかった。人差し指一本で人の人生を決めてしまうのかと考えさせられ、本当に恐ろしいことだと思った。カンボジアでのアキ・ラー地雷博物館を訪れたときも、地雷に対しての恐ろしさ、戦争の恐怖さを実感した。そこでは、特に印象に残っている言葉があった。それは、『貫くという勇気』『かえるという勇気』『行動に移すかどうか』である。その言葉を聞いて私は、この研修に来て良かったと感じ、心にあった不安が一気に吹き飛んだ。両国について恐怖感を持っているため、心の中に不安があるのだ。自分から変えていかないとこの恐怖感がなくなることはないのだと思った。さらに、『行動に移すかどうか』この言葉を聞いて「はっ」と考えさせられた。「なぜこのインターンシップに参加したのか。参加して何が自身の中で変わり、今後の将来はどうするのか。」など参加した理由の答えが見えた気がした。自分から変えていかなければ、今までの自分よりも成長するのはできない。あとはどう自身が行動に移すか。これが一番難しい問題ではあるが、行動するという気持ちが大切なのだと学んだ。さらに、この研修で一番楽しみにしていた、アンコールワットの遺跡修復作業の体験では、現在大学で学んでいる知識では足りないことがたくさんあり、学芸員資格取得を目指している私には非常に良い体験となった。机上だけの知識よりも実際に行動に移して作業するのでは全く異なった。レンガとレンガを重ねるための接着剤に砂糖、石灰などを使用する。一つ一つ手作業で遺跡を修復するなど知らない事があり、将来、どのような方向に進んでいくのかという問いに影響されたと思う。

このインターンシップで様々なことを学び、日本では決して出来ないような体験を多くさせてもらった。参加して非常に良かった。インターンシップに参加する以前よりも自身が成長したといえる。今後この研修で学んだ様々な知識、経験を活かし、自身がどのように行動に移すかが今後、私の一番の課題である。

『発展途上国の現状が知りたい』これがこのインターンシップの参加を決めた理由。今まで日本という先進国の中で何不自由ない暮らしを送り今まで育ってきた。今回のカンボジアでのインターンシップに参加して自分がいかにめぐまれた環境で育っているのかということを感じ、どうすればカンボジアが発展するのか考えさせられた旅でもあった。最も考えさせられたことは『教育問題』。今回はそれに焦点を当てたい。

カンボジアは日本と同様 6-3-3 制。しかし貧しいせいで就学率が非常に低いというのが現状である。良い職に就くためには勉強しなければいけない、勉強したいけれど家族のために働かなければいけない、ただ悪循環で結果知識も仕事も得られず貧しい生活を繰り返すだけなのである。しかし学校に通えたとしてもカンボジアの教育の質は極めて低い。その1つとして教室不足というものが挙げられ授業は午前と午後の二部制。1人当たりの勉強時間は他国の生徒に比べ短い。また教師という職が低所得ということもあり副業している教師が多い。パニャサ大学の学生が「学校に行っても先生が仕事に出かけて授業を抜けたりする」と言っていた。日本では考えられないことなので非常に驚いた。カンボジアの教育を向上していくにはどうしたらいいのだろうとこの旅で考えさせられた。今すぐにはどうこうできる話ではない。日本のようにするには 20 年、30 年かかるだろう。結論、他国からの支援がないとこの国は発展しない。Give and Take で日本から見れば Give ばかりで何ももらえることはできないかもしれない。何か恩返しをほしくて与えるのではなく、助けたいというその気持ちが大切なのではと思った。

カンボジアの学生に日本の JICA や CIESF という機関を知っているか尋ねたところ知らないという答えが返ってきた。支援している側としては非常に残念な答えでショックだった。カンボジアは少しずつ発展している。発展できているのは外国からの支援があるからということを知りたいと強く思った。支援し続けるだけでは私たち日本としては意味がない。日本にはこういう技術があって、だから今教えている、支援していると日本へのアピールをする必要があると思った。

カンボジアには教育だけではなく、下水処理、地雷、孤児、ごみ山といった問題がまだまだある。そんな問題を抱えているとは思えないガイドのホンさんをはじめ、孤児院、農村の子供たち、TAYAMA の生徒たち、みんなの笑顔はキラキラ輝いていて、日本人にはない心の豊かさを持っているように感じた。私たちに欠けている“心の豊かさ”。何不自由ない環境で暮らしているのに、私たちはちょっとしたことで腹を立てたり、嘆いたりする。こんなにも恵まれた生活をしているのに。日本人の心は本当にちっぽけだ。今回カンボジアを訪れたことで、日本という恵まれた国に感謝して、カンボジア人のように心豊かに生きていこうと思った。

このインターンシップは多くの出会いがあり、とても素晴らしい経験ができた。本当に

ありがとうございます。たくさんのものを与えてくれた JAPF、今度は私が誰かに何かを与えたい。

Google ではみつけれないもの

京都大学大学院 人間・環境学研究科修士 1 年生 第一陣

私は J A P F のインターンで、多様な価値観を実体験し、自身の視野を広げ、将来に繋がりたいという気持ちで参加を決めた。だが、12 日間の日程の中で数々のカルチャーショックを受け、帰国してからもしまだに現地のことが思い出される。今回の論文では、それらの中でも特に価値観を変えた 3 つの出来事について述べたい。

一つ目の出来事は、物売りやストリートチルドレンの存在だ。私は子どもとは学校に行き、教育を受けるものであるという固定観念で生きていたことを痛感した。確かに、「貧しい」国には、教育を受けられない子供たちが存在するということは、統計上の数字で知っていた。しかし、一ドルを求めて目の前に迫る子供たちを目の当たりにして、いかに自分が盲目的であったかを知った。教育とは、個人の基礎となり、国家の糧となるものであると思う。教育制度の重要性を改めて実感した。

二つ目の出来事は、ポル・ポト政権の認識の違いである。私は出発する前、ポル・ポト政権が行ったことを調べた。国民の大量虐殺や強制労働など、狂気に包まれた犯罪者としてか思えなかった。しかし、現地に行ってポル・ポトを完全に悪く言う人はいなかった。ガイドのマハホンさんもアキラー地雷博物館のアキラーさんも、「ポル・ポトの行った人殺しは悪いことだけれども、100%悪い人ではない」と言った。特に、アキラーさんの、ベトナムとの政治的関係性のために真実は隠蔽されているという言葉聞いたときに、現地に行かなければ分からないことがあるということを強く思い、また真実は小説より奇なりという言葉思い出した。大々的に主張するテーマの陰にこそ、隠したい何かがあることを常に意識しながら、世界情勢や国内情勢をみる必要があると学んだ。

三つ目の出来事は、「豊かさ」の基準について分からなくなったことだ。今回のインターンで感じた「豊かさ」とは、人とのつながり合いの密接さなのではないだろうかと感じた。つまり、孤独を感じずどこかで他人に対して許容していることが、人々の「豊か」な生活を支える根幹なのではないかと感じた。カンボジアやベトナムでは、人々の距離が非常に近いと感じた。外国人である私たちに対して優しく、バイクの相乗りなど危険かもしれないが、そこに他人に対する信頼が見て取れた。確かに安全という意味では重要なのだが、日本に帰国して、車間距離を保ちながら運転する車を見て寂しさを感じた。日本はどこか他人に対して懐疑的であるという印象を持ってしまった。

以上の三点が、私の価値観を変えた出来事である。今回のインターンで、私は東南アジアの「熱さ」を非常に好きになった。格好つけず、発展やより良いものを求めて成長を渴望する姿を見ることが出来たと思う。これから、このインターンシップで感じたことを何らかの形として活かすことは勿論のこと、必ず近いうちにまた足を運び、更なる学びを深めたいと考えている。

インターンシップスタディツアーを終えて

近畿大学 経済学部国際経済学科 2年生 第一陣

今回、12日間のカンボジア・ベトナムインターンシップに参加させていただけたおかげでたくさんのいい経験を積むことができた。

有名な観光地、各地の学校、現状を改善しようと試みている様々な組織、どこも興味深いところばかりだったが、このインターンシップの特徴として普通の観光では訪れることのできない公的機関、組織への訪問があげられる。そこに魅力を感じたため参加を決意した。

日数が10日を超える海外研修は初めてで何をするにも不安ばかりだったが、皆で行動していくうちに少しずつ不安が薄れていったように思う。そんなインターンシップだったが、学ぶことが多くあった。

ベトナムでは主に戦争関連の場所をまわったが、クチトンネルに実際にもぐってみて当時のベトナム人の忍耐強さに驚いたし、戦争博物館ではベトナム戦争のむごさを目の当たりにした。

カンボジアでも内戦関連の場所をまわったがどちらともいかに戦争が人を人でなくするのか感じさせられた。

また、先にも述べた普通の旅行では入る機会のない公的機関や団体、孤児院などではどこからも現状をよくしようとする思いが強く感じられた。

一番の参加の決め手だったゴミ山に行くことができなかったのは残念だったが、ほかの場所でも多くの学ぶものがあった。毎日のディスカッションではその日のうちに知った問題点をグループで話し合ったが、そのたびに問題の深さ、難しさを実感させられた。

移動では主にバスを使ったが、バスの窓からみえる国の風景も興味深かった。高床式の家や大きく緩やかな川、その水を飲む牛、物売りの人々、目立つ寺院。一つ一つに日本との文化の違いを感じ、その違いがなぜ生まれるのかを考えるのは面白かったしいい勉強になった。

しかし、今回の自分はやはり訪問者であり異邦人。ブラウン管や液晶の画面がバスの窓越しになったに過ぎない。それでも手に届く範囲でベトナム・カンボジアを感じることはできたのは自分にとって大きな違いである。今回のインターンシップの経験を埋もれさせることなく、社会に貢献できる人間になれるよう残りの大学生活のあり方を見直していきたい。

ヴェトナム・カンボジアインターンシップを終えて
神戸女学院大学 人間科学部 3年生 第一陣

ヴェトナムとカンボジアに行く前に持っていた印象はとても暗いものでした。数年前に読んだ資料では、ゴミ山、ストリートチルドレン、子供の売買など、日本にいる私には信じ難い言葉が出てきました。また、日本から多くのボランティアが訪れて学校を建てたり、井戸を掘っていて、他国からの支援を多く受けている国という印象もありました。しかし、そのような支援がカンボジア人のニーズに合ってるか、役立っているかは疑問に思っていました。そのため、今回の研修では私が興味のある保健や福祉、そして教育において日本の NGO や政府、民間の取り組みを知り、これからの支援の仕方を考えることを目的として参加しました。

カンボジアで実際に支援を行っている日本人の方のお話は、私の研修の目標のヒントになりました。彼らは、カンボジア人の気質や文化を十分に理解し支援を行っていました。また、事業には必ずカンボジア人を起用し、日本からの一方的な活動ではないものでした。現地には、これからのカンボジアはカンボジア人の力でまわして欲しいと思って活動している日本人がほとんどです。ですが私は研修で学ぶ中で、それを実現するのはとても大変なことだと実感しました。過去に起こったポルポトの圧制による知識人の喪失は、国の成長には大きなハンデになっていました。そのためカンボジア政府が行うべきことは多く、時間もかかることが察せられました。やはり、カンボジア人だけで問題を解決するのも他の国が助けすぎるのでもなく、バランスの取れた協力はこの先も必要だと思います。その支援も、カンボジアの人々が必要としているものであることが前提条件だと学びました。

訪れた日本語学校では、生徒たちの日本語取得に対する意欲の高さに驚かされました。ビジネスで使うことを念頭に置いて、勉強だけでなく挨拶や礼儀などがしっかりと身につけている点も感心した点です。生徒たちとの会話をしていると、よく日本のことを知っているなという印象です。それに対し、私のカンボジアに関する知識は少ないことを痛感しました。カンボジアの支援を考えていくのなら、この国についてもっと知る必要があります。日本語学校の先生が、教師の賃金が決して高いものではないが、カンボジアの子供たちへ自分の受けた恩を返したいと話す目はとても熱いものでした。ヴェトナムとカンボジアの戦争の跡地を巡ったことで、平和の重要性が身をもってわかりました。少年兵として働かされた子供、地雷や枯葉剤の犠牲になった子供を見ました。その姿を見て、参加者同士でなぜ子供まで戦争に動員されるのか怒りの混じった議論になりました。ヴェトナムは戦争を経験した国として、今ある平和を維持するために過去の記憶を忘れないこと、他国に平和を啓発する役をしっかりと担っていると感じました。

私はこの研修の中でヴェトナムとカンボジアへのイメージが変わりました。日本人の多くが、これらの国が全体的に経済的に貧しく、未開発の地なのだと思っています。

しかし、経済的な貧しさはイコールで心の貧しさではありませんでした。カンボジアの人々は自国民であることに誇りを持ち、家族やコミュニティのつながりを大切にしていました。この特徴は日本人が見習うべき点であり、日本の諸問題を解決するヒントになるのではないかと思います。

ベトナム、カンボジアツアーを終えて
兵庫県立大学 経済学部 2 年生 第一陣

ベトナム・カンボジアは発展途上国なので貧しい国だ。そして貧しいのはかわいそうだから寄付などの支援をすべきだ。

旅行に行く前に自分がその 2 か国に持っていたイメージだ。この考えは大方間違っていないのかもしれないが、この 2 週間で自分がいかに短絡的だったかを考えさせられることとなった。ベトナムの都市に関しては高層ビルも多かったし、デパートなど日本と物価がそう変わらない店があることを考慮すると安易に「貧しい」と定義するのはいささか強引であるように感じた。またカンボジアも田舎などに行くと確かに水道や道路もなかったが、各々の家にはマンゴーやパッションフルーツなど様々な果物の木があり、彼らはその木や葉っぱさえも利用する。また季節も雨季と乾季しかなく日本のように冬が来ないことを考えると凍死する恐れもない。確かに彼らは貧しいが、以上のことを考慮すると土地的、天候的にも日本より恵まれている部分は数多くある。そして、これは自分の直観だが、現地の子どもや自分と同じ年齢くらいの人を見ていると暗い未来が想像できなかった。そしてそもそも自殺率の非常に高い日本が他人のことをかわいそうだといえるのか。このツアーが進んでいくうちにこのような考えになった。そして自分は何が足りないかというのが具体的にわかったツアーでもあった。

様々なところで学ぶところが多かったが、もっとも自分が影響されたのは教育系の施設を見てまわった時だった。具体的には、パニャサ大学、TAYAMA 日本語学校の生徒と交流した時だ。まず初めに感じたのは、彼らの勉強や将来に対しての「熱さ」だった。パニャサ大学に行き、彼らとともにプレゼンを作った時も積極的にプレゼンをよいものに、そして限られた時間につくろうという意思が感じられた。

一方、日本の学生は僕を含め時間が少なく自分たちの英語力で大丈夫なのかと不安から入っていたような気がした。確かに日本の学生はあまりディスカッションやプレゼンを作る機会というのはあまりなく、英語を人前で話す機会も学部によっては皆無だ。しかし、それをもってしてもあまりにも彼らが主導権を握っていたし、何よりすごいと感じたのは相手の意見に反論してくるとこだ。ここは僕らと違う。例えば僕がカンボジアについてここが改善点だと発言すると、私たちは改善点ではなく改善策がほしいと言われた。全くその通りであった。しかし、ここで僕に反論がなければ先に進めず、よりよいものは作れないうえ、新たなアイディアは生まれない。おそらく彼らはそのことを知っていて、多少の意見のすれ違いを恐れることはないのかもしれない。これを改善するためには個人の頑張りも不可欠だが、日本の教育システムにも問題がある。日本は高齢社会でこれから人口も減っていくと予想されている。つまりマーケットが小さくなっていく。これを考慮すると、日本は海外に視野を向け、参入していかなければならない。そうなったときに現地の人とうまく連携を働かなければならない。そこで大切なのは自分の意見を伝えることだ。そう

考えると今の日本の教育はテストのためのインプットが多くを占めている。故に知識は豊富にあるが創造性や伝える力はほかの国に劣っている。その改善策として、もっと高校くらいからディベートやプレゼンテーションなどの授業をカリキュラムにいれてもよいはずだ。このように個人、市や県の教育機関がもっと危機感を持って変わっていかなければならないと強く感じた。

最後に私個人としてこの2つの国（特に後発開発途上国と位置づけされているカンボジア）に、どう貢献できるかを書いて最後とする。私が出来ること。それは「伝える」ということだ。前の段落で書いた教育然り、アンコールワットのすばらしさ然り、国の体制然り、国民性など同じアジアにあるベトナムやカンボジアについてまず知ってもらい、考えてもらうことが私のできる最大の貢献だと自分の中で結論づけた。

スタディツアーを終えて

関西学院大 学商学部 3年生 第一陣

私は、国際協力というものに関心があり、支援・援助を必要としている国に実際に足を運び、自分の目で現状を見たいという思いでこのツアーに参加しました。

そういったなかで、私がこのツアーで一番印象に残ったことのうちの一つは、KURATA ペッパーを訪問したときの倉田さんがおっしゃっていた「カンボジアは本当は貧しくない」という言葉でした。私たち日本人はカンボジアを貧しい国、お金がなくてかわいそうだと思っている。そういった面があることは確かだ。だけど、全てがそうではない。カンボジアではお金がなくてもそれなりに生きていける。日本はお金がないと生きていけない。日本みたいにお金のために必死になって仕事に追われることがあまりない分、余裕ができ心に豊かさが生まれる。そう考えると、ある意味日本のほうが貧しいのかもしれない。この言葉を聞いて、私は自分のもつ支援や援助というもののイメージに疑問を感じるようになりました。これまで、私はカンボジアのような国が日本などの先進国と同じようなレベルにまで発展することが、その国やそこに暮らす人々の幸せにつながると考え、そのための支援や援助が喜ばれるものだと思っていました。でも、それは全部日本を基準にした価値観でしかないということに気付かされました。もちろん、電気や水道など生活に最低限必要な環境を整えることは大切だと思います。しかし、日本人のように生活することが彼らにとってより良い生き方なのか。今の環境に合った暮らし方をしている人々が、本当にそうなることを望んでいるのか。こういったことは今まで考えもしなかったことでした。

もう一つ、このツアーで印象に残ったものはあの国の人々の笑顔とガッツです。特に、孤児院や農村、日本語学校で出会った子どもたちのあのきらきらした笑顔は忘れることができません。笑顔を向ければ必ず笑顔で返してくれる。たとえ言葉は通じなくても笑顔で人は分かり合える。笑顔のもつパワーを改めて感じました。また、日本語学校の子どもの勉強に対するあの姿勢に驚かされました。日本じゃありえないくらいの質問の量に正直圧倒されました。何事にも真剣に取り組み、何事にも興味関心を抱いている様子は逆に見習わないといけないなと思います。

この 12 日間を通して一番強く感じたことは、自分の知識の少なさ、考えの薄っぺらさでした。ガイドさんのお話を聞いたり、向こうの学生さんと交流をしたりするなかで、日本について自信をもって人に説明できるほどの知識が自分にはないということに気が付き、それを大変恥ずかしく感じました。また、メンバーとのディスカッションや交換日記を通して、同じものを見たり聞いたりしても、人によって考え方や受け取り方は様々であるということを改めて感じ、様々な視点から物事を考えることができたと同時に、自分がいかに日本の価値観や先入観でしか物事を考えられていないか、物事を表面上でしか捉えられていないかを痛感しました。でも、それに気付けたことが大きな収穫だと思っています。ここで感じたことを忘れずにこれからどうしていくべきかに活かしていきたいです。交換

日記やディスカッションは、研修で感じたことや自分の意見を人と交換したり、ぶつけ合ったりする大切さ、楽しさに気付かせてくれる大変良い機会であったし、これらのお陰でこの研修がより簡単には忘れられないものになっていると思います。

このツアーに参加して本当に良かったと思っています。今までで一番濃く有意義な 12 日間でした。見知らぬ人たちと見知らぬ土地で過ごすということで正直不安が大きかったですが、思い切って一歩踏み出してみて良かったです。JAPF のスタッフさん、ツアーメンバーのみんな、そして現地で出会ったすべての人々に本当に感謝しています。

僕がベトナムに到着して感じたのはまず自分が想像していたベトナムとの違いでした。僕のイメージではベトナムやカンボジア＝かなり未発展で、まさかビルがあるなんて想像していませんでした。現地についた瞬間に自分がいかに海外について無知であるかを思い知りました。現地に着いて見るもの、聞くもの、感じるものは新鮮なものばかりで本当に濃い 14 日間でした。

インターンシップのカリキュラムの中にくまれている日本語学校の訪問はいい刺激をうけました。みんな僕たち日本人を歓迎してくれて、勉強に対する意欲も今の自分の比になりませんでした。この日本語学校の訪問以外にも、JAPF の学生たちにもいい刺激を受けました。ディスカッションのときに皆の意見を聞いていても、僕と見ているところが全然違い、「こんな風に見えてたのか、こんなことにも気づいたのか。」と覚えることが多々あり、皆の意識の高さに驚かされました。

この 14 日間でカンボジアという国の抱えている問題についても考え、僕がまず思ったのは、カンボジアの発展に海外が干渉し過ぎなのではないか？カンボジアの人たちは本当に国の発展を望んでいるのか？ということです。カンボジアは確かに僕たち日本人からしたら不便なことが多いと思いますが、カンボジアの人たちをみていてもみんな不満そうでもないし、カンボジアの教育問題について話を聞いたときに、教師に教育の本を渡しても読まずに放置する。という話を聞き、現地の人々が自発的に行動しないといくら海外が手助けをしても意味がないし、カンボジア人からしたら海外の手助けはただのありがた迷惑なのか？と少し感じました。けれどやはり手助けできる部分はどうか手助けできればなと思いました。

最後にこのインターンシップでガイドをしてくださった方たち、引率の二人には本当に感謝しています。とても有意義な二週間を過ごすことができました。ありがとうございました。

ベトナム・カンボジアスタディツアー
久留米大学 商学部 3年生 第一陣

今回、ふとしたきっかけでこのスタディツアーに参加させていただきました。その中で多くの事に気づかされた13日間だったと思います。自分にとっては初めての海外でしかも東南アジアということで最初は治安の事ばかり気にかけていました。しかし現地について2、3日が経った頃、物売りのまだ幼い子供に手を引っ張られながら何か買わないかと懇願されたことがありました。あまりに唐突な出来事でその時は何も考えず断ったのですが、後に孤児院の子供であったり、ガイドの方と接することでその判断には大きな意味があったことを思い知りました。カンボジアにおいてはベトナム戦争の影響が飛び火して今もなお生々しくその現状が続いているということに驚愕しました。国境付近の町であっても道路が十分に舗装されていなかったり、教員不足や学校不足、労働環境など様々な問題が山積みで、とても一つの国が抱えるには重たすぎるものばかりでした。しかしこういった暗い面ばかりではなく、良い面がみれたこともこのツアーに参加したことで見えてきました。実際に、カンボジアで長年働いている日本人の倉田浩伸さんのお話は一つ一つが重みのあるものでした。そんな倉田さんは「カンボジアは日本より豊か」とおっしゃっていました。日本人の価値観からしてみれば、日本のほうが経済力があるし、水道や電気も通っている何不自由ない生活がなぜ豊かではないのかとその時は疑問に思いました。だけど日本に帰ってきてやはり痛感したことは日本人にはたとえ物質的な豊かさがあるとしても、心の豊かさにかけていることでした。向こうの人は貧しいながらも、原付に家族全員で乗って団欒したり、満足にきれいな飲み水が飲めなくとも無邪気な子供たちの笑顔を見ていると、一概には貧しいと言い切れなくなりました。経済的に豊かではないから貧しいというのはただの日本人の価値観であってベトナムやカンボジアの人々のように、周りの人と助け合いながら生きていくことのほうがやはり人間の本質ではないのかなと思います。また自分個人としてはこのツアーで自分が今まで余程受け身で何事も取り組んでいたとおもいしらされました。向こうの日本語学校で日本についての魅力を伝えようとしていたとき自分は生まれ育った国のことすらあいまいな理解をしていたことを教わりました。カンボジアの子供たちは学ぶことに一生懸命でどんなことにも常日頃から疑問をもっているからか、自分に日本について質問されたとき、すぐには答えられないような難しい質問ばかりでした。そうしたとき、直ぐに答えられるのと答えられないのでは全然、交流の仕方が変わってくるため日本に帰ってきてからはより一層自主的に様々な国のことに興味関心を持っていきたいとおもいます。

このツアーでは、全く地域も大学も違う学生たちと毎日意見を交換できたことも自分にとって大きな刺激になりました。その日研修で学んだことをすぐディスカッションすることで自分にはなかった発想が聞けたり、逆に自分が意見を言うことはベトナム・カンボジアを理解するいい機会だったと今になって思います。

今回のツアーで少しでも自分が変わったこと、また、自分に何ができて何ができないのかが見えてきたと思います。これからはこのツアーで感じたことを風化させないためにも多くの人にベトナム・カンボジアのことを伝えていきたいと思います。

インターンシップを終えて

福岡女学院大学 人間関係学部 2年生 第一陣

私が一番印象に残っていることは孤児院で子供たちと遊んだことです。まず、孤児院についてときすごくちゃんとした建物ですこしほっとしたのを覚えています。そして子供たちが待っているところへ行きましたが子供たちの多さに驚きました。こんなに大勢の子供たちがここで生活しているのだと思いました。そしてあっという間に子供たちと打ち解ける事ができました。子供たちは無邪気でどの子を見ても笑っていました。孤児院に行って元気をもらったのは私たちだといっても過言ではないと思います。

次に孤児院の代表者からお話を聞きました。そこで衝撃をうけたのは、代表者が大学生で孤児院出身だったことです。とてもじゃないけど私にはできる事ではないと思いました。孤児院はごみ山で生活している子供や親がいない子供を集めた場所だそうです。そして受け入れは無限大だと聞きました。だからあんなに大勢の子が夏休みにも関わらずいたのだと思いました。そして孤児院で生活しているから学校なんて行っているはずがないと思っていましたが、それは大きな勘違いでした。なんと大学にいくまでサポートしているそうです。大学にいけるのは少数ですが子供たちの多くが勉強をして大学に行きたいといっていてとても素敵だと思いました。

これまで驚いたことや良い面を挙げてきましたが、もちろん問題点もたくさんあります。孤児院に限らずいえることですがそれは衛生面です。料理をつくる場所はたくさん虫が飛んでいたりお米にはハエが集っていたり水道場所にはネズミがいたりでとてもじゃありませんがここで料理をしているとは思えない環境でした。衛生面については人々の意識を変えていくことが大切でこれから良い環境作りをしていくことがカンボジアの課題ではないかと思います。

最後に、孤児院の子供たちが笑顔で私たちを受け入れてくれたのにはカンボジアの国柄が関係していると思います。カンボジア人はみんないつも笑顔でとても親切でした。このツアーで一番深く感じたことはお金や地位がすべてじゃないことです。明日ご飯を食べるお金が例えなくてもカンボジア人は笑顔で生活すると思います。それに比べて日本人はどうでしょうか。なにかきついことがあったらすぐ自ら命をたってしまうし、イライラすることがあったら人を危めてしまう人もいると思います。なんてちっぽけなんだろうと思います。日本は本当に恵まれている国ですがこのことを私たちは忘れがちなのではないかと思います。このツアーに参加して色んな事を学び、日本ではできないことをたくさん体験しました。今生活できている環境に感謝していつも笑顔でいることが大切ではないかと考えます。

もう一度このツアーに参加したいと思うほど濃い 12 日間でしたし、本当に参加してよかったと思いました。

私は、今回のツアーを通して発展途上国と先進国の違いを肌で感じて、目で見て知ることができた。そして今までの自分を振り返れるいい機会になった。

今回ベトナムとカンボジアの2ヶ国に行ったがどちらも共通して言えることは、みんな笑顔であり、尚且つ異国から来た私たちにも優しく接してくれたということだ。日本ではまず笑顔で優しく接してくれることはないに等しいだろう。だが私は、この笑顔に感じるものがあつた。なぜならベトナムは、戦争があり、カンボジアはポルポト政権という残酷な歴史があつた。それを乗り越えての笑顔は偽りのないものであろう。しかしながら発展途上国であるから貧富の差は歴然としていた。道路では高級車が走っているその横で服も着ていないかわからない親子が物乞いをしている。それを見た時は胸が苦しくなつた。なかでもカンボジアで物乞いに來た3歳程の女の子がいた。物乞いの子を見て同情してしまつた自分がいた。非常に自分は小さい人間なのだろうかと悔いた。この子達は、生きていくために必死で働いているのにそれを理解できなかった自分が恥ずかしい。日本でもホームレスを蔑む目で見ている。同じ人間なのに、たまたま自分は生活に困っていないだけで他は何ら変わらないのに。

今までの私は、自分が優先、自分が、自分がと自己中心的に物事を考えてきた。だが、今回のツアーに参加して様々な人を見て、異文化を体験して、学んで考えてこのままの私でいたら狭い世界でこの先過ごしていくに違いない。その様な考えは改め今度は、私ではない他人の為に生きてみよう、そして将来的には世界で貧困などに困っている人々を救えるような人になろうと目標を立てることが出来た。そのためには、もっと国際文化、社会情勢に目を向けなければならないと新たな課題も出来た。私は、今後目標に向けて行動していく。

小学生の頃、テレビを見ているとカンボジアの子どもがゴミ山でひたすらゴミを拾っている様子が流れていた。その子は、「学校へは行きたいが、家に余裕がなく働くしかない。」と言っていた。私は、自分より小さいその子がゴミ山で働いていることをとても可哀想に思い、何かしたいと思った。他にも、日本人がカンボジアで井戸を掘るというテレビを見て、「カッコいいな、私にも何かできることは無いだろうか。」と考えていた。このようなことから、カンボジアに興味を持っていった。そして、今回このスタディツアーに参加した。

このスタディツアーでは、自分の目で見てカンボジアについて考えたいと思っていた。そして、私の正直な感想は「カンボジアってとても豊かな国だな。」というものであった。私が見たのはカンボジアのほんの一部で、全体のことは何もわかってはいない。しかし、少なくともカンボジアに来る前に考えていたような国ではなかった。ゴミ山へ行ったとき、働いていた小学生の男の子に「この生活に不満はないか」と質問をした。すると「この生活に不満はないし、楽だから良い。」というものだった。周りを見渡しても、ゴミ山で生活している人は幸せそうに見えた。私は今まで、色々な情報を鵜呑みにし、狭い視野で考えていたことに気づかされた。

今回、たくさんの人に出会い、一人ひとりからそれぞれ刺激を受けた。もちろん、ツアーに参加していたみんなからも強く刺激を受けた。そして、特に大切に感じたことが三つある。一つ目は、自分の目で見て様々な視点から考えること。私は日本で育ったために生まれた価値観を通してカンボジアを見ていた。そして、その価値観を押し付けようとしていた。私にとっての優しさは相手にとっても良いことか。など、そんなことは考えもしなかった。一つの視点からしか考えることができていなかったのだ。それでは、本当に相手のことを理解することはできないのだなと実感した。二つ目は、コミュニケーションの大切さだ。このツアーでは通訳の方がついてくださって言語に関して何不自由なく過ごすことができた。しかし、通訳を通して相手と話すことと、自分がその言語を理解して、その言葉で話すことは全然違うと思う。通訳を通すと本当に知りたい部分がわからないのではないかと思う。相手が本当に伝えたいことを理解するためにも、まずは英語から始めてみようと思った。最後に三つ目は、学ぶことの重要さである。TAYAMA 日本語学校へ行き、生徒の皆さんをみて素敵だなと思った。向上心が強く、一人ひとりが輝いていて、私は正直カンボジアであのような人たちに出会えるとは思っていなかった。

このスタディツアーで自分が今までいかに狭い考えをしていたかを気づかされ恥ずかしくも思った。今回見たこと聞いたことをもとに、カンボジアをはじめ、世界で問題とされていることについてもう一度考え直したい。答えはまだ出ないけれど、目を離さずに、これから考え、学んでいきたい。そして、私が知ったことを他の人とも共有することが出

来たらよいと思う。

幸せってなんだろう

京都女子大学 文学部 2 年生 第二陣

学校の掲示板に貼ってあった JAPF のアンコールワットのポスター。世界史の教科書で見たアンコールワット。あ、アンコールワット見たいなー。あれ、でもカンボジアってアンコールワット以外に何があるのだろう。カンボジアってどんな国なのだろう。最近よく日本人がカンボジアに行って井戸掘ったり学校作ったりしているけど、実際どうなのだろう。本当のことを自分の目で確かめたい！と思ってこのスタディーツアーを選んだ。

ツアーに参加する前のカンボジアは貧困のイメージが強かった。日本に生まれた自分はすごく恵まれているなあと思っていた。しかし、いざカンボジアに行ってみると日本生まれた自分は幸せ？カンボジアに住んでいる人が幸せではない？ということをとくさん考えさせられた。特にゴミ山視察は衝撃的だった。ゴミ山で生活するなんてありえない！ゴミ山は健康にも害を及ぼすし、そこに住む人たちのことも考えて早く撤去すべきでないかと思うていた。しかし、このゴミ山に住む人たちはこのゴミを拾うことで生計を立てているため、このゴミ山がなくなったら生活できなくなってしまう、ゴミを撤去してしまったら多くの人の生活を奪うことにもつながると分かって驚いた。ゴミ山に生活がかかっている。でもここで暮らす人はずっとこのままでいいの？本当は町に出たいんじゃないの？と思った。完全に日本的価値観でしか見る事ができてなかった。しかし、そこに住む人たちは家族といわれて幸せと言っていた。家族か。確かに家族といれる時間はすごく大事。すごく根本的だけど一番の幸せがここにはあると思った。一生スカベンジャーで生きていくのもいいのかもしれない。中には先生になりたいなど夢を持っている子もいた。ゴミ山で暮らす子供たちは学校には行っているものの、時間も勉強する教科もすごく限られていた。だから将来の選択肢もかなり限られていると思った。それでも夢を持っている子もいた。私たちはほとんど 1 日中、学校に行って勉強して塾にも行って必死に就職して働く。選択肢がすごくたくさんある。てんてこまいで忙しい。ストレスも溜まる。選択肢がたくさんあることも見方によっては幸せでもあるし幸せじゃないこともあると思った。

そして KURATA ペッパーの倉田さんの話。カンボジアの人たちはつい最近までお金がなくても生活できた。それがカンボジアの良さでもあった。しかし、外国企業の進出や外国人観光客によって把握できないほどのドルが持ち込まれ、お金の流通が激しくなってお金がなくては生活できないようになってしまった。お金がなくても幸せであったカンボジアの人たちの生活を外国が参入することによって変えてしまったと聞いた。そこにゴミ山での生活と重なる場所があった。ゴミ山で得られるお金なんて私たちからしたら、今時の小学生のお小遣いにもならないくらい。それでも現地の人はそのお金だけで十分な幸せな生活が送れている。また外国の参入の面で言えば、冒頭でも述べた日本人が井戸を掘ったりすることや、学校を建てること。全面的に本当にカンボジアの人たちの役に立っているわけではないということ。問題も多々あること。カンボジアにはその風土や住む人たちに

適したやり方、生活のあり方、幸せのあり方があるということを肌で感じる事ができた。自分の日本的価値観もぐらぐら揺れた。今まで異文化理解と言いつつも自分の生活基準でいろいろ物事を判断していたが、カンボジアの人たちの生活も素敵だと思う。私が訪れた場所なんて本当にごく一部だけど、実際に行くのに行かないのでは全然違うと思った。

日本に帰って思うこと、それは、やっぱり日本も素敵だということ。いっぱい見て、聞いて、考えて、話し合った 13 日間。でもこの研修の終わりが私の本当のスタートです。

最後に心が突き動かされるようなプログラムを組んでくださった JAPF の皆様、一緒に参加した 2014 年夏Ⅱ陣のみんな。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

スタディツアーに参加して

信州大学 医学部 4年生 第二陣

今回のスタディツアーに参加する前は、「発展途上国＝貧しい」というイメージであった。しかし、今ではそのイメージが覆された。衝撃的であった出来事の一つに、カンボジアでのごみ山の研修であった。スカベンジャーに話を聞く機会を通して、彼ら全員がごみ山での生活を抜け出したいと思っているわけではないということを知った。家族とずっと一緒に毎日その日その日食べて生きていけたらそれで幸せということ価値観である。資本主義の日本でずっと生活してきた私の価値観の中での幸せと、スカベンジャーの彼らにとっての幸せなど、それぞれ色々な幸せの形があるということを強く感じた。今回は限られた時間の中であり、ほんの一部であると思うが価値観は本当に様々であるということ学んだ。また、ごみ山の子どもは教育を受けることができる環境にあったが、年齢制限があり、詳しくは分からないが恐らく教育の質もあまり良くないことなどから、日本の子どもと比較すると将来就ける職業は非常に少ないと考えられる。これは平等とは言えないと思うため、子ども自身が選ぶことができる環境を整えていくことが必要と考えた。

孤児院では、子供たちが外国人に対して慣れていて驚いた。子どもたちの夢が叶えられるような支援がされているというのは恵まれていると感じた一方で、家族と一緒に暮らすことができているという面では、上にも挙げたスカベンジャーの子どもと比べると、どちらが良い・悪いと簡単に言えないと感じた。

カンボジアの研修全体を通して、カンボジアの国家予算の半分近くが海外からの支援であることや、アメリカドルが当たり前に使えるという状態であることなどについて、それぞれ良い面・悪い面があるということを知り、これからより詳しく学んでいきたいと考える。

タイでは、農村にホームステイというとても貴重な体験をした。言葉がほぼ通じない中、私達日本人を受け入れてくれた農村の方々に非常に感謝している。時間がゆったり流れている中で、日本と異なるタイの農村の生活、文化を学んだ。その中でそれぞれの地域・場所で独自の文化・生活スタイルがあるということを感じた。

このスタディーツアーを通して、普通に旅行に行っただけでは経験できない数多くの貴重な経験ができた。研修、その後のディスカッションを通して、今までにない新たな視点が見つかり、視野が広がったことを感じた。それと同時に、自分の価値観が通用する世界はまだまだとても狭いということも感じた。今回考えたことや感じたことをこれからの生活に活かして、広い視野を持った人間になりたいと強く思った。また、自分の目で見て、感じて、考えることの重要性についても学んだため、これから実際に見て学ぶことを大切にしていきたいと考える。

「自分の生きる世界を見つめ直すきっかけを得た 13 日間」

日本大学 法学部 4 年生 第二陣

正直、タイとカンボジアは「日本より劣っている」と思っていたし、家族や友人からも「なぜ東南アジアに行くの？きれいなヨーロッパに行けばいいのに」と言われた。私がこの研修に参加した目的も「アンコールワットに行きたいから」「お金と時間があるから」「前回ヨーロッパに行ったので次はアジアに行きたかったから」という不純な考えがあったからだ。しかし、この研修は、私の知らない世界を発見できて衝撃があったし、自分の目標を改めるきっかけとなった。

衝撃的だったのは、孤児院・ゴミ山で生活する人や子供たちである。ゴミ山に住む人を見て、「なぜゴミ山に住んでいるの？環境を変えないとかわいそう」と思うのが普通ではないか。私もそうだった。しかし、ゴミ山に住む人の価値観は違っていた。1 日生活できるだけのお金を稼げればよい。病院も学校も近くにあり、かつ無料なのでわざわざ町に出て稼ぐ必要もない。日本人は残業してまで一生懸命働くことが美德とされるから、彼らの考えは「内向き思考」に見えるのかもしれないけど、そこに住む人はそれで十分なのである。また、ゴミ山の子供たちは、「栄養失調で食べ物も満足に食べられずやせ細っている」と思っていた。確かに、日本の同年代と比べたら見た目は幼いかもしれないけど、極端に栄養失調が悪いような子はいなかったし、服もしっかりしたものを着ていた。私が今まで考えていたことは全部「押し付け」「上から目線」にしか過ぎなかった。

孤児院もそうだ。「かわいそうな子供たち」と思っていたけれど、私たちが来たらすぐに懐く。「孤児院」と言うが日本の「児童福祉支援施設」に近いかもしれない。日本のこういった施設はどちらかというと親が頼んで子供を預けるようなイメージがあるけれど、ここは、施設の担当者がゴミ山や農村に直接行き、子供を引き取るというような形である。子供にとっては少し寂しいかもしれないが、孤児院に入れば十分な食事・友達・教育を受けることができるのだから親も負担が減るし、将来的に子供が社会に出るのに不利なことはない。カンボジアの「そのような場所」にいる子供たちは案外幸せなのかもしれない。

しかし、その一方でアンコールワットを始め、観光地では常に「オネエサン 1 ドル」と小さな子供から声をかけられた。驚いたのは、プノンペンで信号待ちをしている車にフルーツを売っていた子供がいたこと。売り子の中には、断られて悲しそうな目をしている子、断られながらも欧米の観光客と話すのを楽しんでいる子、様々いたが、これは他の世界遺産では見られない光景だと思うし、それを警備は何も取り締まっていない。あの子たちがどんな気持ちで売り子をしているのか分からないけれど、少なくとも観光客という目線からあの子たちを見れば「カンボジアは貧しい」というイメージを持つであろう。「毎日生活できるだけでいいからこんな環境でも幸せ」「生活できそうにない」そんな 2 つの姿をカンボジアで見た気がした。そして、それに対して何もできない自分がとても悔しかった。

この 13 日間で、今まで勉強してきたこと・経験したことが覆され、新しい価値観を得

た。日本はタイ・カンボジアに比べたら確かに金銭的に裕福かもしれない。でも「国民幸福度ランキング」では下位にある。「幸せとは何か？」自分の中で答えは出せないけれど、「お金があるから幸せとは限らない。」そんな世界に触れることができてよかったと思う。また、TAYAMA 日本語学校で生徒が「日本は本当に素敵」「日本大好き、行きたい。」と言っていた。しかし、私は正直に「来てね。」とは言えなかった。高齢化社会・ニート・過疎化…日本は将来様々な問題を抱える。観光で素晴らしい日本。でも、それは「外国人向け」であって、表面的な日本にしか過ぎない。もっと、「中から」、私に何ができるか分からないけれど外面だけではなく、中身もいい日本にするために「考えること」を忘れずにいたい。そして、微力だけど「日本を変えること」これが私の目標だ。13 日間ありがとうございました。

タイ・カンボジアスタディーツアー型インターンシップを終えて
法政大学 法学部 国際政治学科 3年生 第二陣

今回 JAPF のスタディーツアー型インターンシップに参加して学んだことたくさんありました。タイでは短い期間ではありましたが農村でそこに住んでいる人々の実生活を学べたこと。カンボジアは遺跡を守るために世界中から支援をもらっていること。その支援金を政府は観光業に依存していて道路舗装などインフラに使っていないこと。農村ではいまだにガスがなくまきや炭で火をおこしていること。まだ地雷がいくつか残っているかわからないため完全撤収がいつになるかめどが立っていないこと。トゥールスレン収容所やキリングフィールドでは内戦の生々しさを実感したこと。“観光”慣れした孤児院の子供たち。日本人より礼儀作法のしっかりしていた TAYAMA 日本語学校の人々。その中で私は1番価値観の多様性を学ぶことができました。

価値観の多様性。これは必ずしも先進国の価値観が発展途上国の価値観と一致しないということです。それはゴミ山の研修に行ったときに強く思いました。景観やにおいがひどく衛生的にも良くないゴミ山をどうやったら市内からゴミを減らすことができるか、またゴミ山で生活している人々をどのようにしたら生活水準を上げられるかと考えながらゴミ山に向かっていました。しかし実際に現地の人に話を伺ってみると私が思っていたこととは全く違う意見を聞いて衝撃を受けました。ゴミ山の人の中には現在の生活に満足している人はいたということです。ゴミから資源を集めそれを売りあとはのんびり過ごせるため今の生活が楽だと。また子供の中には都会では遊びに行くだけで充分。将来は親のように自分もゴミ山で生活するつもりである。さらに研修の帰りのバスの中で引率者の方が、ゴミ山があるおかげで生活できている人もいるので、簡単にゴミ山をなくすことでできないと聞きました。また、別日に行った KURATA PEPPER の代表の倉田さんがお話してくださった中に印象的な話がありました。グリム童話のアリとキリギリスという物語です。倉田さんはアリを日本人、キリギリスをカンボジア人に例えて、日本人はアリのように働くのが良いとされているかもしれないが、カンボジア人はキリギリスのようだ。しかしカンボジアには冬がない。冬がないならアリのように働く必要はない。カンボジアの人はのんびりしながら仕事をしている。アリが良いというわけではない。ということを知って、私は今までカンボジアのような発展途上国の人は貧しいから私たちが助けなければ、と思っていたが、その考え方は先進国、日本にいる私だから当てはまることで、カンボジアの人にとっては私たちがしようとしていることが必ずしも幸せにつながるとは限らない。相手の立場に立って物事を見なければいけないなと実感することができました。今世界はみんな同じような方向、考え方に向かっていると感じます。それが良いこともあるが、悪いこともある。お互いの価値観を尊重して、固有の文化や考え方を残していきたいと強く感じました。

日本に帰国してから洗濯物をふと見たときにその服が made in Cambodia と書かれて

いました。今までだったら何も感じていなかったと思いますが、カンボジアを意識する前から、私はカンボジアの人にお世話になっている、支えられて生活していると実感することができました。

13 日間のインターンシップを通して

久留米大学 文学部心理学科 3 年生 第二陣

私がこのインターンシップに参加しようと思ったのは、単純に外国というものに行ってみたいと以前から思っていて、たまたまこのインターンシップの募集を見て、いい機会だし行ってみようというのが始まりでした。そしていざ行ってみると初外国ということもあり、些細なことからはほとんどにおいて衝撃を受けることばかりでした。そんな中で始まった研修ではとても多くのことを学ばせてもらえたり、考えさせられたり、刺激を受けたりと内容の濃い 13 日間でした。

私は研修の中で思ったのが日本という国は恵まれていると思いました。そして以前までは恵まれているということが幸せなことであると思っていましたが、それだけが幸せではないと気づかされました。日本では普通に水道水が飲めたり、交通や道路が整備されていたり、しっかりとした教育を受けられたり、何事もなく平和であったりなど私達はそれが普通だと錯覚していることに気づきました。恵まれていないことが可哀想だから支援して助けることは正しいことではあるけども、逆に私達先進国の価値観を押し付けているということにも気づかされて、複雑な思いにもなりました。

カンボジアでもタイでもその他の国の人も、私達よりも英語を話すことができみんな会話しているのに、会話ができなかったことにとても悔しかったことが心に残るものがありました。また、私自身が英語に対して、「どうせ日本いるから使わないでしょ」という甘い考えにいたということが恥ずかしいと思いました。だから私は英会話できるように勉強してやろうと心に決めました。日本では勉強ができるというのが当たり前だからこそそのハングリー精神のなさでもあるとも思えました。

カンボジアで特に感じたのが、みんなが生きることに必死で、貧しくても大変なことが過去にあっても、人々にはつらつとした笑顔や明るさがあることです。アンコールワットでは、幼い子供や赤ちゃんまでもが物売りを必死にしているバスまで追いかけてきたりして売る姿やゴミ山で毎日 1 ドルにも満たないお金で生活している人達、孤児院では親を亡くしたりなど大変な状況であったのにみんな笑顔で明るかったです。これらを見て私は「今までなんて小さなことでよくよしていたのだろう」と思いました。

またインターンシップのメンバーと大学ではすることのない真剣な話についてディスカッションをすることやそれぞれがとてもしっかりしていて、ちゃんとした目標とかを持っていて、その目標に向かって突き進んでいたりしているのを聞いたりしてとても刺激をもらいました。このメンバーだからこそできた経験することもあり、みんなには本当に感謝したいと思います。そして引率の方々には私達参加者の何倍も大変な思いをしているのに、迷惑をかけたり、気遣ってくれたりと申し訳なさ感謝の言葉で一杯です。また、ガイドさんの方々やホームステイでお世話になった村の方々にもとても感謝しています。

この 13 日間でカンボジアやタイのことにに関して、ごく一部かもしれないけど学んだこと

や見てきたことをみんなに伝えていきたり、生活の中で生かしていきたいと思います。
そしてディスカッションで解決できなかったことやこれから私達が現地の人々に何ができるのかを考えていきたいと思います。

インターンシップを終えて

同志社大学 商学部 2年生 第二陣

このレポート一枚に言葉で全てを書き尽くすことは不可能な程、濃く中身の詰まった十三日間だった。自分の生きてきた世界とはまるでかけ離れている体験の連続で、気づきや考えたことの全てを整理し記憶に留められないことが悔しい。この濃く刺激的な研修を通じて感じたことを一言にまとめるとしたら、「自分の常識や価値観が通じる範囲は物凄く狭い」だ。

この研修の最大の不安要素であったタイの農村でのホームステイ体験から始まった。今まで経験したホームステイのどこよりも言葉は通じないはずなのに、どこよりも暖かかった。村の人々はせわしなく働く様子はない。大人たちはのんびりと家事や仕事をこなし、子供たちは学校へ行く。みんなが何よりも人との会話を楽しむ様子は、村の全員が知り合いなのだろうと思わされる程だった。確かに、日本にあってここに無いものは多かった。しかし、人々の笑顔と生活から滲みでていた幸福感は圧倒的に日本のそれを超えている。たった二日間の生活だったが、日本で感じることのできない豊かさがそこにはあったと言いつける。私たちは日本で暮らしていると必要以上に多くのものを与えられすぎて、一体何が幸せなのかわからなくなっているのだろう。幸せ、と感じることに必要なものは実はそれほど多くは無いのかもしれない。

幸せや生活の豊かさについて自分の持っている価値観が通じる範囲がいかに狭いかを痛感させられた出来事がもう一つある。それはカンボジアのゴミ山訪問だ。字のごとくゴミの山であり、衛生環境は劣悪で日本なら人が住める場所ではない。しかし、カンボジアでは違う。誰かが暮らす場所にマスクを着用して集団で訪問するのも失礼な気がしたが、そうせざるを得ない程の状況だった。最底辺とも言えるそこに住む誰もが現状からの脱出と生活の向上を求めており、それを手助けする国際援助は無論正しいと思っていた。この考えは自分の偏った価値観によるものでも何でもなく、むしろ皆に共通する普遍的な考えだと信じて疑っていなかった。しかし、インタビューに答えてくれた住民は「今の生活に満足しています。」と迷わず答えた。度肝を抜かれた。ゴミ回収車が運んでくるゴミの中からお金になるものを拾い集めその日の暮らしに必要な分だけを稼ぐ。あとは遊んだり寝たり好きに過ごし、とても楽なのだという。子供達も教育は受けているが、ゴミ山を離れて働く将来を夢見ている子は少数派だった。生きる上で必要な全てが欠如しているように思われるゴミ山で暮らす多くの人々が、自分は幸せだと言いつけていたのである。訪問前に持っていた価値観や考えはまるで覆された。同時に、無知の援助ほど怖いものは無いのだと感じた。手を差し伸べたつもりでも、それが誰かの幸せや満足を奪ってしまう危険性も十分にある。本音は自己満足や社会へのアピールを目的とした、知識のない建前だけの国際援助が流行しているのも考えものである。

やはり、A4 のレポート一枚では考えたことや感じた事の何百分の一しか書くことはでき

なかった。とにかく色々なことを考え抜いた。そのどれもが答えの見つからないものであるが、自分の知らない世界を見て感じ考える機会を与えてもらったことに感謝している。研修をコーディネートしてくださったスタッフの皆さん、引率の学生スタッフさん、現地ガイドさん、そして研修をより有意義なものにしてくれた参加者のみんなに改めてお礼を言いたい。皆さんに会えて良かったです。十三日間、本当にありがとうございました。

インターンシップを終えて

福岡女学院大学 人間関係学部心理学科 2年生 第二陣

初めは、貧しい国へ行ってみたいという好奇心と、海外から見た日本の姿を知りたくてこのスタディツアーに参加した。また、タイでのホームステイや、遺跡修復、HIV 病棟、孤児院などを一回の研修で行えることにも魅力を感じた。

タイではホームステイを体験したが、日本の田舎暮らしとは全くと言っていいほど別のものであった。科学や技術的進歩の面でいうと、タイの農村は日本よりも劣っていた。しかし、人間の心の面でいうと、タイのほうが温かいと感じた。家に鍵があるわけでもなく、近所の人たちが遊びに行きあうのは当たり前。技術進歩だけが果たしていいことなのだろうか。技術が進歩することによって人間は物欲に襲われる。そのことによって犯罪も増え、周りの人への不信感とつながる、それが正しいといえるのだろうか、そんなことを考えさせられたホームステイだった。

カンボジアでは、まず日本には体験できない国境を陸続きで超えるということを体験した。国境を超えた瞬間、何が変わるというわけではないが、バスが街中を進むにつれ、カンボジア色が出ていたような気がした。ホテルは中級以上と聞いていたが、新しいとされているホテルにはすでに蜘蛛の巣が貼ってあり、浴槽にはひびが入っていた。何もかもが日本とは違い、ある意味で新鮮な空気を感じられたが、カンボジアの中で特に刺激的だったのが、TAYAMA 日本語学校、ゴミ山、キリングフィールドだ。私たちは小学生から学んでいる英語を、いまだに習得できていない。しかし日本語学校の子たちは、2年間でほぼ習得し、卒業していくという。そんな子たちが学びたいと思ってくれている日本。本当に私たちは胸を張って自慢できる国なのだろうか。そんな子たちに何か伝えられることがあるだろうか。次にゴミ山。ハエが 20 匹足に集っているのに何も思っていない子供たち。ゴミ山に住むことを幸福と考えている子供たち。今の時代、知る権利がある子供たちに対して、外の世界を、もっと豪華でにぎやかな世界を教えてしまうのは残酷なことなのだろうか。最後にキリングフィールド。残酷なのはわかる。しかし、残酷すぎて想像ができなかった。命って何だろう。正しいことって何だろう。

どこに行っても疑問形で終わってしまった。前期、まじめに学校に行っていなかった私にとって、大変勉強になった。価値観や幸せ、本当の正や悪。なにが基準でなにが普通なのか、全く分からなくなった。でも、それは自分の中で良いことだと思っている。

きっと、今回カンボジアにいったなかったら、この生ぬるい環境に甘えて浸っていただけたと思うからだ。今の環境に感謝しながら、自分が今回の経験をいかに最大限に生かせるか。行くだけならだれでもできる。これからたくさんのこともっとまなんで、何年か後に、またカンボジアへ行ってみたいと思った。

タイ・カンボジアでの研修を終えて

京都大学大学院 法学研究科 1年生 第二陣

タイ・カンボジアでの研修を終えて、今思うことは、「何が正しいことなのか、よくわからなくなったな」ということです。この13日間、今まで感じたことのない世界に触れました。例えば、ゴミ山で暮らす人たちの世界です。私自身は、毎日ゴミを拾って、その日食べていけるだけのわずかなお金を得て、ただそれを繰り返すだけの生活を送りたくはありません。日々知識や技術を身につけて自分の力を高め、自分が生きる世界に何か肯定的な変化を起こしたいと思います。ゴミ山の人たちも、当然自分が今生きている環境から抜け出したいものとはばかり思っていました。だから、このままゴミ山で暮らせればそれでいいし、それが幸せだという人がゴミ山にいることに驚きました。研修中、このような価値観の違いを実感する体験を繰り返すうちに、最後の研修先でJICAの事業を教えていたときには、違和感が強く残るようになっていました。JICAの方たちは、日本の支援を経て、100万人の人が「安全な水」にアクセスできるようになったとおっしゃいます。でも、それは私たち日本人にとって「安全」なのであって、カンボジアの人たちにとっては、水道なんて整備しなくても、すでに「安全な水」だったのではないのか。海外の投資がしやすい環境を整えるというけれど、海外の資本を受け入れた結果、都市部に大金を動かすことのできる事業家が生まれ、登記制度を利用して土地を奪い、農村の人々を追い出す事態が生じたというような話も聞きました。

地雷博物館では、海外からの援助が少なくなると困るから、地雷に関して政府のデータと食い違うデータを公表するアキラさんが拘束されることがあったという話も聞きました。地雷の撤去という人の生命を守る仕事をしている人が、なぜそんな理不尽な扱いを受けなければならないんだと最初は思いました。でも、海外の支援を受けることで救われるカンボジアの人たちがたくさんいるのなら、アキラさんの動きを封じることは、もしかしたら正しかったのかもしれない。そんな、何が正しいことなのかわからないことだらけの中でも、自分がこれをやるべきだと自信をもって言えることが今1つだけあります。それは、TAYAMAで日本語を学ぶ皆さんに対して、胸を張ることができる日本の社会を残していかなければならないし、自分たちの手で作っていかなければならないということです。

TAYAMAでは、日本人と仕事がしたい・日本語を使って仕事がしたいという思いで、現実の日本を越えるような「日本的な基準」で、毎日日本語の勉強に励む人たちがいました。そんな人たちが日本に来てくれたとき、日本人と実際に仕事をするようになったとき、日本はこの程度だったんだと失望させることは絶対にしたくないんです。

そのために、まずは自分自身が、自分が成し遂げたいことに向かって挑戦し続けるかっこいい日本人でありたいと思います。私は、現在弁護士になるための勉強をしていますが、弁護士になってやりたいことの1つに、アジアで頑張ろうとする日本人・日本企業を法的な側面から支えたいということがあります。海外に活躍の場を移すにあたって、彼らが法

的に不測の不利益を被らないよう、後顧の憂いを断ち、存分に彼ら自身の挑戦に集中できる環境を整えたいと思っています。私は、やっぱり日本のことが好きで、日本のために働きたくて、他のどの国にも負けたくない。だから、正直なところ、例えばカンボジアの人たちの幸せを第一次的な目標に掲げて頑張る続けることはできないと思います。でも、日本人・日本企業がカンボジアで活躍するためには、カンボジアの人たちが日本人・日本企業との関係で幸せであることが必要不可欠なはずで。日本企業は、現地で雇用した社員の福利厚生に気を使っており、社内寺子屋のような形で一定の教育も行っているため、歓迎されているという話も聞きました。日本の一方的な価値観を押し付けて、搾取しようとするれば、そんな関係は長続きしない。私は、日本の幸せのために、それが第一次的な目標ではないけれど、カンボジアをはじめとするアジアの人たちの幸せにも貢献していきたいと思っています。

JAPFの皆様をはじめ、研修でお世話になった全ての方への感謝の気持ちを込めて

2014年9月14日

2014 年度夏季インターンシップに参加して

京都女子大学 発達教育学部教育学科心理学専攻 3 年生 第三陣

「ベトナム・カンボジア インターン生募集！」1 回生の時から気になっていた JAPF のポスター。日本でぬくぬくと育ってきた私は、そのポスターの中に「知るべき世界」の存在を感じていた。毎春毎夏、予定が合わずに参加を逃していたが、ついにこの夏「一步」を踏み出すことができた。そして共に旅した 13 人との 12 日間、ベトナム・カンボジアで様々なことを感じた 12 日間は、私にとって一生を通して忘れたくない日々となった。

そして今回は、自身の中で感じ取れた気づきを報告させていただきたい。まずはカンボジアのイメージが変わったことがある。戦争・内戦を経て、「貧しい・悲しい」イメージを持っていたカンボジア。しかし実際、人々は明るく“これからだ”というエネルギーに満ちていた。車窓から草ぶきの高床式住居を見た。日曜の夕方に集って遊ぶ子どもたちを見た。一つのテレビを大勢で囲む光景を見た。建設中のショッピングモールもあれば、靴を持たない物乞いもいる。幸せとは何なのか。物理的なもので判断できない部分と明らかな格差の広がりを目の当たりにして、その国の風土を無視して行われる支援が生むものは狂いかもしれないことを感じた。と同時に、それらを考慮した支援の必要性を感じることができた。インフラ整備、病院・学校・孤児院運営、所得格差、文化財の保護など課題は山積みで根深いが、発展途上とは“これからがある”ことなのだと強く実感した。

そして次に私は自分の国のこれからをもっと考えるべきではないか？という気づきである。今回学んだ 2 つの国の歴史と課題。それは日本においても言えることが多くあった。国がより良い方向に変わるためには、内側（国民）から変わらなければならないこと、研修を通して「日本の内側を担うのは私たちだよ。」と言われた気がする。これからが楽しみな意識の高い仲間との出会い、自分なりに一生懸命考えること、それを言葉にして相手に伝えてみること、積極的に質問してみることの大切さや楽しさを知った。幸運なことに、やろうと思えば何でもできる境遇に身をおいている自分。世の人々はどんな人にも価値の優劣はなく、違うのは環境だけだと研修を通じて感じた。考える余裕を与えられた私たちが、考える・行動することなしに苦しい境遇にいる人々へ顔向けはできない。研修に参加する前、私は何事も「当たり前と思わない」で日々を過ごそうと思っていた。それが今「当たり前と思えない」に変わったことに世界観が広がった嬉しさ、それに気が付けたことへの安堵、同時に焦りを感じる。様々な方の尽力、支援のもとに与えられた今回の機会に心から感謝し、自身の今後の糧としたい。それが少しでも多くの人、モノ、国への貢献になれるよう、これからも視野を広げ、経験を積み重ねていきたい。

日本について教育の必要性。なんと幸運。私は教育学部にいるではないか！
価値観の押しつけは狂いを生むこんな経験をもっと積み重ねたい。自分のために人のためとなる生き方一生勉強。後悔は最小限。

「スタディーツアーを終えて」

共立女子短期大学 文科 2年生 第三陣

今回のツアーでは沢山の人に出会いそして刺激を受け、非常に充実した日々を過ごすことが出来ました。

現地では異なる環境で暮らす子どもたちと交流する機会があり、それぞれの子供たちから何か違うものを感じました。孤児院に訪問した際は、子供たちは遊んでほしいとばかりに日本人の私たちに飛び付いてきました。しかし私の場合は一緒に遊ぶために日本から持参した折り紙や風船を持っていたため、子供たちは私からそれを貰おうと群がって、最終的には私の手から何も無くなり子供たちの中で奪い合っていました。ありがたく貰ってほしかったのではなく、私としては一緒に遊ぶつもりだったので、その勢いと姿を目の前にして正直言葉を失いました。同様の光景をゴミ山でも目にしました。ゴミ山の子供たちは私たちが捨てるつमोरの服や靴、残飯が残ったお弁当箱を奪い合っていました。まさに今の生活に精一杯という様子です。情報としては物乞いする子を含めこのような子供たちがいることを知っていましたが、実際現地で目にすると居た堪れない気持ちになりました。

また違う日に農村の子どもたちと短い時間ですが遊ぶ機会がありました。印象的だったのは、孤児院と比べると農村の子供たちのほうが本当の意味で笑顔が輝いていたことです。彼らは水道も電気もない自給自足の生活をしています。この状況を聞いて日本人の私たち「貧しい＝不幸」というイメージを持つでしょう。私自身も今までこのように思っていました。現地で彼らに出会い、これは日本人の勝手な思い込みであることに気づかされました。私たちが貧しいと思う生活は、彼らにとってはそれが地域に根付いた生活なのです。現地の人々がなぜそのような生活をしているのかをまず理解した上で、先進国の私たちは本当に必要とされている支援を行うことができるのではと思いました。彼らにとって都市部の人たちと同じような生活をするのが決して幸せではないはずです。子供たちの様子からして明らかに生き生きしていました。お別れの際も子供たちのほうから「一緒に遊んでくれたお礼に歌を歌いたい」と言い、学校で習ったという「幸せなら手をたたこう」を日本語で元気いっぱい歌ってくれました。心からの笑顔で歌うその表情はまさに幸せそうでした。その後一人ずつ飴を配ったのですが、みんなその場で順番を待って「オークン（ありがとう）」と笑顔で受け取っていました。それはまさに彼らが現状に満足している証拠です。

今回のツアーで出会った子供たちのために私には何が出来るのか、何が必要とされているのか、帰国した今もずっと考えています。でも私が何かをすることで彼らの生活がいきなり改善されるわけではないのは確かです。それでも今の私に出来るのは「伝える」ことだと思っています。現地の環境を肌で感じてきたからこそ、周囲の人に自分の言葉で伝えることが出来ます。今回のツアーで学んだことを忘れずに、これからは「伝える」だけでなくカンボジアのためにできる自分の役割の幅を広げていきたいです。

「あっという間の12日間だった。」というのが研修を終えての一言目である。「なかなかできない経験をしたい。」と思い、JAPFの研修参加を決め、日本にいたときから自分なりにアンテナを張ってベトナムやカンボジアのことを知ろうと努力したが、日本にいたとなかなか知ることのできない事実が、現地に行くことでものすごい速さで吸収できた。過去の暗い歴史、戦争の惨たらしく生々しい記録、過去が現在に与え続ける現実、カンボジアが抱える多くの社会問題、日々学んでいく度に視野が広がるのとともに考えなければいけない問題の深さ、多さを実感した。時には考えることに行き詰まりながら、そして時には現地の人の笑顔や思いやりに心を温められながら研修を受け、解決法が見つからなくとも、少なくとも現実を知り、“自分ができることは何か”ということ“自分が見ているもの、考えていることがすべてではない”ということ忘れてはいけないと思うようになった。また、こちらの生活をしていくなかで、小さなことを気にせず、ある程度流れに任せて行動する、無駄なことを考えずその時その時を最大に楽しむというスタイルがより強く身についた。この成長は将来壁にぶち当たった際に自分を励まし、勇気づける大きな収穫である。さらに研修を通してこれから先ずっと大切にしていきたいたくさんの出会いも得られた。カンボジアで出会った孤児院の人懐っこい子供たち、無邪気に走りまわる農村の子供たち、熱意をもった志の高い学生たち、笑顔で人を幸せにしてくれる街の人々、共に学び考え笑いあった研修仲間、彼らはこの夏、私に大きな変化と自信を与えてくれた。特に現地の学生とは連絡先なども交換できたので、いい刺激を与え合い、日本とカンボジアを繋ぐ強い関係をつくっていきたいと思っている。カンボジアには私が思わず目を背けてしまいたくなるような貧困、ゴミ山をはじめとした問題が多くあり、そのような問題が少ない恵まれた環境で育ってきた自分にどうしようもない気持ちになることもあった。しかし、現地の人や仲間が与えてくれた希望の気持ちをもっと多くの人に与えられる世界にしたい、自分もより良い世界を築く人間になりたいと思うようになった。“自分ひとりでできることは限られている”、“どんなに大きな目標を描いても一度に達成できることは限られている。”ということを経験した。長いスパンで努力してこそ実るということ忘れず、「結果が出ない」とあきらめないで、小さいことからでも自分の信念を持って行動することで、誰かのためになることができるのだというスタンスは持ち続けていきたい。

当初の目的通り、この夏の経験は一生心に残るであろう。異国の地に赴き、観光するだけでなく、ベトナムとカンボジアを様々な視点から見て、感じることもできた。これをきっかけによりベトナム・カンボジア、そして世界に興味を持つようになったのもっともっと多くの価値観に触れる機会をつくっていききたい。また、今回研修でカンボジアについて考えたのと同じよう、自分たちが一番影響を与えられる国、自国日本についても熱く

考え行動していきたい、そしていつもイキイキと笑ってられる人間でありたいという想いをずっと持ち続けていきたい。

中学生のとき、校長先生との面談で、将来どんな仕事がしたいか？と訊かれたことがありました。人の役に立つ仕事がしたい、と答えたところ、どんな仕事でも誰かの役には立っているよ、と笑われてしまいました。たしかに…。大学に入学しました。しかし、自分の将来の展望はなかなか見えてきません。自分は何がしたいのだろう…。そんな時に会ったのが、ある新聞社の JAPF に関する記事でした。貧困と戦争。イメージばかりが先行する中で、果たして、東南アジア諸国は今、どんな状況なんだろう…。この目で見てみたい、そう思い応募しました。

カンボジアの大地。広がる草原。自由奔放に動き回る放し飼いの牛たち。急変する天気。交通ルールのほとんどない（笑）交差点。現地の人たちの笑顔。カンボジアには豊かな自然とそこから生まれる人々の長閑な日常がありました。シュムリアップの農村には、貧しくても陽気な人々の声が響いていました。孤児院のこどもたちも元気いっぱい。私のイメージは悉く覆されました。

カンボジアの社会問題について参加者の方たちで行ったディスカッションも生産的な内容でした。教育問題。そこから広がる格差社会。この問題を解決しようと進出する先進諸国。現地の人々の声、「日本は私たちのお手本です！」。

カンボジアにはカンボジアの美しさがありました。人々の快活な笑い声は、もはや日本には失われたもののようで、本当の幸せって何だろう…と考えさせられました。カンボジアにおける識字率の低さは確かに問題があります。それに伴う子どもたちの将来の選択肢が絞られてくるのは、平等な社会を考えたときに大きな障壁となります。しかし、彼らの生活には笑顔があり、伝統がある。私たちの価値観を押し付けない援助の形を常に模索していく必要があると思いました。

研修先で最も印象的だったのが、HIV 病棟での患者さんとの面会でした。死と隣り合わせの生活をしている患者さんたちには、十分な医療が提供されているようには思えませんでした。自らの死と向き合い、孤独と戦っている彼らを精神的に少しでも救えるような人になりたい、そう思うと様々な課題が浮かんできました。

今回の研修を通じて私はカンボジアが好きになりました。また、訪れたい、そう思うと同時に、他の国との比較をして、より客観的にこの国について考えたいと思いました。

今こうして振り返ってみると、この 12 日間は私の価値観を揺るがすほどの刺激に溢れた、濃密なものであり、その非日常性から夢だったのでは、と思ってしまうくらいのインパクトがありました。個性的で、愉快的参加者の皆さんとの出会いも私の財産です。JAPF 関係者の方やその他多くの方々のご尽力から、貴重な体験をさせていただきました。引率の猿渡さんをはじめ、共に学んだⅢ陣の皆さん、その他の関係者の皆様に心から感謝したいです。

インターンを終えて

神戸市外国語大学 外国語学部2年生 第三陣

この12日間は長くも短くも、非常に内容の濃い研修でした。この研修で私が最も深く考えさせられたのは、価値観の違いです。私たち日本人一人ひとりでさえ違うのに、国籍の違うカンボジア人とは勿論大きく異なりました。私たちが当たり前だと思っていること、それはあくまでも日本に住み慣れた日本人からの視点であって、必ずしもカンボジアでは当たり前とは限りません。幸せとは何か。何をもって幸せと言えるのか。日本よりずっと貧しい暮らしをしている彼らは、日本人よりずっと心が豊かでした。彼らが見せる屈託のない笑顔、次世代のカンボジアを担う熱意に触れました。お金だけが幸せじゃない。物事には必ず理由があって、それを様々な視点から見るのが大切だということを学びました。

一方で、この国は本当に多くの問題を抱えていました。多くの人が持っているカンボジアのイメージ「貧困」という一つの問題点の水面下には、「教育」「環境汚染」「交通事故」「人身売買」などの問題が複雑に絡まりあっていました。一つ一つの研修先で現地の人に話を伺い、実際に自分の目で見て、聴き、感じ、さらにそれをホテルに持ち帰ってメンバーとディスカッションすることで、より考えが深まりました。今まで自分が如何に表面上でしかこの国のことを知らなかったのかを思い知らされました。教科書を読んだり、インターネットを見たりするだけではわからないことを学びました。そして、私の中で特に大きかったのはディスカッションの時間です。やはり人の意見を聞くというのは自分を成長させるうえで非常に大切なことでした。メンバーは皆驚くほどに色々なことを考えていたし、それこそ一人ひとりの意見があって、良い刺激を沢山もらったし、勉強になることも多くありました。この研修期間ほど深く物事を考える機会は今までなかったと思います。このディスカッションの時間を経験して、普段からどれだけ自分が考えていないか痛感したし、だからこそ日本に帰ったらこの12日間のようにもっと自分の頭で思考して、はっきりとした自分の意見を持って、それを他人に伝えてみたり、他人の考えを訊いてみたり、そういう生き方をしようと思えました。本当にメンバーには感謝しています。

この研修でカンボジアの実態に触れ、この国を変えようと奮闘している人々に出会い、同時に自分の無力さを知りました。ここで得たものを、これからの生活で少しずつでも形にしていけたらと思います。

『カンボジア・ベトナムで感じたこと』

大阪府立大学 工学域 1年生 第三陣

私が日本に帰ってきて最初に「カンボジアにもう一度訪れたい」と思いました。このツアーに参加する前はカンボジアという国の事を全く知りませんでした。しかし、徐々にツアーが進むにつれてカンボジアの良さが分かってきました。

まずカンボジアに着いて思ったのはバイクが多くて道が悪いということ。道路がもう少し良ければ産業の発展が進むのではないかということを思いました。そのために日本が道路造りを支援していることを知り日本の事を誇らしくも思いましたが、同時に国の発展には時間がかかるということも分かりました。そして私が最も興味を持っていた教育分野では唖然としてしまいました。授業は教科書を音読し暗記するだけ。先生のレベルもバラバラ。生徒の学びたいという意欲と学校が提供できる教育の質が釣り合っていないこと。そんな現状を打破しようと日本の CIESF という団体がカンボジアの教育を支援していました。まだまだこれからという感じでしたが私も日本から協力できることはないかなと思いました。

それでも「カンボジアにもう一度訪れたい」と思ったのはカンボジアやベトナムの人たちの人柄の良さです。どこを訪ねても笑顔であいさつしてくれる彼らは少しいい加減なところもあるけど人を楽しませ、自分もしっかり楽しむという不思議な雰囲気を持っていました。そんな陽気さを見習いたいと思いました。特に孤児院では私たち外国人に対して昔からの友人のように接してくれて楽しいひとときを過ごせました。少し別れるのがつらいと思うほどでした。日本語学校では、こんなにたくさんのカンボジアの若者たちが日本に興味を持っていることを知り嬉しく思いました。たくさん日本について質問もしてくれて情熱が伝わってきました。日本の紹介もうまくいきもっと日本を好きになってくれたと思います。そして日本について私たち日本人自身もっと深く勉強しなければならないと思いました。また日本に憧れを抱いているカンボジア人たちもっと自慢できるようなところを増やしてさらに日本を好きになってもらいたいと思いました。

戦争を知る分野の研修では、心から過ちは二度と繰り返してはならないと思いました。それは、実際に戦争を体験した人のお話を聞くことができたことやどれだけ辛いものだったか自分の言葉で説明していただいた時の様子からです。日本にいる時はただぼんやりとしか分かっていませんでしたが、カンボジア・ベトナムで改めて理解することができてよかったです。

最後に、このインターンシップスタディーツアーに参加して他のメンバーの意見を聞いて、あらゆる方面での自分の世界を広げることができて良かったです。

JAPF スタディーツアー型インターンシップ報告

インターンシップを終えて

筑波大学 情報学部 3 年生 第三陣

今回のスタディーツアーでは、本当に様々なことを学んだ。今までヨーロッパやカナダなどの先進国と呼ばれるような地域にしか言ったことがなかった私にとって、ベトナムとカンボジアは、大変刺激的な国々であったといえる。このスタディーツアーの中で特に印象に残った出来事について述べていきたいと考える。

まずは、子供たちについてである。今回は、CCH 孤児院、農村、ゴミ山に訪問したが、そのいずれにも子どもたちがいた。それぞれ全く異なった面をもっており、今まで子どもたちの問題にあまり興味を持つことがなかったが、深く考えるきっかけとなった。CCH 孤児院の子どもたちは、予想よりも元気でみんな笑顔で遊んで、そしてしっかり勉強をしていた。孤児院ということで、私達のような研修で来る人や、ボランティアで来る人が多いためか、すぐに懐いてくれた。もちろん、すぐに懐いてくれてうれしい気持ちもあった反面、見世物になってしまう機会が増えてしまうという可能性もあると考えられるため、複雑な心境になった。農村の子ども達は、設備の整った環境で暮らしているとは言い難いが、孤児院の子ども達同様、とても元気で明るく、笑顔向けると笑顔を返してくれた。一番違いを感じたのは、ゴミ山で働く親のお手伝いをしに来ている子ども達である。見学に来た私達のあとをついては来るが、笑顔はほとんどなく、険しい顔つきをしている子が多くいるように感じられた。最後に靴や服、そしてお弁当の箱をあげたときに、奪うようにして、そして我先にと群がってきた光景にショックを覚えた。孤児院や農村の子ども達との違いをそこではっきりと感じた。どの子ども達も幸せだと感じる部分も悲しいと感じる部分もあるかもしれないが、カンボジアの子ども達の未来が明るくなるように、自分にできることをしていきたいと感じた。

その次に、価値観についての変化が起きたことである。今まで、「幸せ」というものが何であるのかということについて、深く考えたことがなかったが、この研修を通して、考えることができた。日本に住んでいる私達からすれば、環境の悪いところに住み、賃金も低く、幸せには思えないかもしれないが、カンボジアの人々は笑顔が多く、不幸せには思えなかった。カンボジアの状況や自分の生活を「このままでいい」という人もおり、私達の価値観の枠組みだけで状況や物事をとらえること、そしてそれを押しつけてしまうことは、カンボジアの人々にとって、本当の幸せにはつながらないということに気付かされた。「もしかしたらこの人、この国にとっては、この価値観はあてはまらないのかもしれない」と考えるようになったことは、今後の人生においても、大いに自身を助けてくれるであろう。

最後に、このスタディーツアーを通して、一緒に行った仲間たちとたくさんディスカッションを行った。その中で、物事を深く考えたり、自分の意見を言葉でうまく伝えたりする経験ができた。また、仲間の様々な視点からの意見というのが、自分の考えが凝り固ま

ってしまうのを防ぎ、かつ新たな考え方を修得でき、とても刺激になった。今までの生活や大学の授業では得られないものを得ることができた。今後もこのことを忘れないように生活をしていきたい。

スタディーツアーから学んだこと

東京工芸大学 芸術学部写真学科 1年生 第三陣

スタディーツアーの12日間は、毎日が衝撃の連続だった。知らなくてはならない、と使命のように興味を持っていた戦争についての知識も深めることができた。更に地雷の問題、ごみ山問題、所得の差、HIV、教育、交通など様々な社会問題を知ることができた。戦争経験者の声、ごみ山に来ている人の声、HIVに感染した人の声、枯葉剤の影響を受けた人の声、様々な当事者の声を聞くことができたのは貴重な経験だった。

話を聞いているうちに、悲しみと隣り合わせでありながらも懸命に生きている人々を知ることができた。問題の解決は本当に難しく、私にできることはなんなのだろう、と何度も思った。無力感とともに、私も懸命に頑張らなくてはならないと感じた。

研修先のカンボジアの人々や、ディスカッションの際の同じ参加メンバーのみんなから、様々な意見と価値観を学ぶことができた。自分があまり目を向けていなかった部分に目を向けていた人の声にははっとさせられた。

実際に足を運ばなくてはリアルに感じられなかったと思う。この経験が大学で専攻していることと結びついたように思う。カンボジアという外国について学ぶことで、自分の国についてよく知らないことを思い出し、日本を学び直そうというきっかけにもなった。世界で起こっていることを皆に、後世に、伝えていきたい。そう思えた。このスタディーツアーに携わってくださった皆様に深く感謝したい。ありがとうございました。

スタディーツアーを終えて

同志社大学 文学部 3 年生 第三陣

正直なところ、自身はこの手のツアーは苦手だと思っていた。カンボジアやベトナムの現状を見て学び、考えるような趣旨であっても、結局は観光になるのではないかと理想ばかり述べる人が集まり、友人作りが目当てになってしまわないか？ ツアーを終えた今、それらの考えはすべて杞憂であったと思っている。ごみ山や孤児院、農村、枯葉剤に苦しむ患者さんたちの居られる病院など、普通の旅行では行かない、或いは行けない場所を訪れた。参加したメンバーは皆、訪れた場所の現状を真摯に受け止め、そのうえで何が出来るかを考えて話し合った。友人は、作ろうとせずとも、12 日間の日程と一緒に過ごすうちに自然と親しくなっていた。いい意味で、私がスタディーツアーに抱いていたイメージはことごとく打ち砕かれた。

ツアーは、とにかく見て、聴いて、考えて、話す日々であった。そのどれもが重要であるが、特に話すこと、ディスカッションの時間を設けてもらったことに感謝している。同じ場所を訪ね、同じお話を伺ったはずなのに、集まって話してみると全く違う視点や考えが出てくるのは本当に驚きであったし、人が多く居ればそれだけ多くの考えもまた存在するのだということを実感した。同時に、それはきっと国などの大きなものを動かしていく際にも起こることで、カンボジアという国で感じた富裕層と貧困層、都市部と農村部などの格差とその間に広がる考え方の溝なども、このようにして確かに存在しているのだと思った。「貧しい」ということや「格差」という言葉に対して、それまで漠然とイメージを抱くだけであったが、実際に訪れると、プノンペンの中なかでも差があり、シェムリアップの中なかでも、一方では最新の iPhone を使いこなす学生が居て、一方では道で物売りをする子どもたちが居て、さらにはそんな彼らの暮らしを見たこともなさそうな農村部の人々も居た。ここが一番貧しい層に違いない、と思ったところがまだ底ではなく、次々にもっとつらい暮らしをしている人々に出会う度、「貧しい」ということの深さを感じた。

印象的な出来事がある。農村を訪ねた時、軽率な行動であったと反省しているのだが、私は子どもたちに飴を配った。全員に行き渡ったかと思い振り返ると、木陰からまだ他の子どもたちが覗いてきていた。こういう事なのだ、と思った。世の中にはたいへんな思いをしている人がとても多く居る。私では救いきれないし、私が力になれることはとても少ないのだ。それを自覚したうえで、果たして自分に何が出来るのだろうか。

しかし、大変な暮らしをしていると思う一方で、それを改善して日本の生活水準を押し付けることが一概に良いとも言えない。プノンペンのイオンモールは、日本のイオンとほぼ差がなかった。あのようなお店ばかりになり、世界のどこでも見られる、同じような服や食べ物に囲まれる生活が必ずしも目指すべき唯一の幸せではないはずだ。旅を通して、幸せとは何だろうかということも気になった。

はたから見ても人が幸せかどうか推量する訳にもいかないが、それでもカンボジアの人々

の多くはとても幸せそうな笑顔を向けてくれたと思う。お話を伺った方、食事や買い物で出会った方、何よりガイドを務めて下さったホンさん。カンボジアを見に来て、知ろうとしてくれているのが本当に嬉しいと思って下さっている気がした。そのように笑いかけてくれるからこそ、私も本当に来て良かったという思いになった。国として問題はまだまだ多く、不十分に見える部分もあるだろうが、それはきっと、これからいくらでも良い方向に向かっていける可能性があるということでもあろう。カンボジアやベトナムが、これからますます素晴らしい国になっていけると信じている。また、旅こそ終わってしまったが、その間に考えた多くの事柄については、まだ結論が出ていないものが多い。これからも考えることを止めずに、旅の間に感じた気持ちを忘れずに過ごしていきたい。

12 日間の研修を終えて

同志社大学 文学部 3 年生 第三陣

今回の研修に参加して、わたしがカンボジアに対して持っていた貧しい国というイメージが日に日に崩れていくのがわかりました。実際には、ただ貧しい国というだけでなく、貧富の差が深刻であることがわかりました。わたし達が暮らす日本では、教育を受けることは当たり前のこととして捉えています。カンボジアの子どもたち、とくに農村地域で暮らしている、には、教育を受けるという選択肢、概念すらないことは衝撃でした。親に教育が必要という概念がないので、子どもに教育を受けさせない、そのことによって、貧困の連鎖が続くのです。しかし、客観的にしかみていないからかもしれないが、わたしが実際に農村を訪れたとき、そこで暮らしている人々は幸せそうにみえました。今の生活に満足しているように見えました。たとえ支援をするにしても、現地の人の意志ではなくわたしたちの視点から、将来的にいいことだとして、彼らの生活を大きく変えてしまうことは、本当に彼らにとって幸せなことなのだろうか、私たちが実際すべきことはなんだろう、と日々考えさせられました。

また、その一方でカンボジアの日本語学校を訪れたとき、彼らのやる気、勉強する意欲がすごく感じられた。元気が良すぎるほどのあいさつをし、質問があるかと聞かれると、ほぼ全員の生徒が手をあげる。わたしたちは、間違えたら恥ずかしい、馬鹿にされるといった理由で、なかなか発言をしない。しかし彼らはたとえ完璧な日本語ではないけれども、積極的に発言をし、間違えればクラス全体で笑い、クラス全体で間違いを指摘し、そんな姿勢が彼らを成長させているのだと感じました。今の日本人学生に足りないもの、忘れているものを彼らは持っていると感じました。海外からの支援だけでなく、彼らのような意識の高い学生が今のカンボジアについて疑問を持ち、社会問題について考え、国を動かす原動力になることが、カンボジアをいい意味で変えていくきっかけになると思う。

カンボジアの人々はとても笑顔が素敵だった。笑いかければ笑いかけてくれる。観光省の方も言っていたように、多くの人がカンボジアに対して固定観念を持ってしまっている。わたしたちのようにカンボジアを訪れた人々が、カンボジアの良さを伝えていく役目を担っていると思う。今回の研修は、物事をさまざまな観点から考えることができたいい経験だった。忘れてはならない 12 日間だと思う。

インターンシップを終えて

同志社大学 文学部3年生 第三陣

9月6日から17日まで、ベトナム・カンボジアインターンシップに参加しました。今回の旅は、私にとって初めての海外への旅ということもあり、出発する前は旅を不安に思い、とても緊張していたのですが、結果としてたくさんのことを学び、多くの刺激を受けることができました。今回の旅で特に印象に残ったことがあります。それは「行動すること」です。

「行動すること」。今回のインターンシップで出会った多くの人は、何かに挑戦し、何かを得て、または得ようとしていました。特に現地で活動しておられる日本人の方々は、皆パワフルで生き生きとしておられました。皆考え方は違えど、日本から遠く離れた異国、カンボジアについて自分が何ができるか考え、行動しておられました。また、現地の学生の向上心にも目に見張りました。日本語学校の学生達は、日本語の勉強を始めてまだ1年ほどだというのに、皆ネイティブである私と会話するのには困らないほどの日本語力を身につけており、非常に驚きました。学生達は厳しい学校のおかげと語っていましたが、私は何よりも彼らの向上心、もっと上手くなりたいと真剣に学び、積極的に行動した努力の賜物だと感じました。彼らの前で行った発表にしても、彼らとの会話にしても、皆真剣に聴いてくれ、大きな反応をしてくれ、積極的に質問をしてくれました。そんな彼らを見ると、自分はこれほどまで真剣に普段講義に向き合っているのかと恥ずかしくなりました。自分では意欲的に学問に取り組んできたつもりでしたが、まだまだでした。また日本の学生たちはとてももったいないことをしているなと感じました。もちろん私たちと彼らとでは学ぶ目的も内容も異なりますが、彼らよりも学ぶ環境の整っている日本で、積極的に学んでいこうとしなくては彼らに申し訳がないと思いました。また彼らほど真剣に授業に向き合ってくれる学生であったら、先生は教えがいがあるだろうなと思いました。「行動すること」を教わったのは何も現地の日本人の方や学生だけではありません。共に旅で様々なことを経験したメンバーからも多くの刺激を受けました。皆専攻しているテーマも、興味を持っていることも様々で、面白い話をたくさん聞くことができました。またディスカッションの時間では、同じものを見ても、自分と異なった意見を聞くことができ、そこからまた新たな考えに至ることもでき、議論の大切さを痛感しました。自分の考えを絶対だと思わず、多様な意見を認め、自分の意見を更に昇華させること。それはとても重要なことだと思います。皆いろんな事を考え、行動していました。私も何か夢中になれることを見つけたい、そのためには行動しなければ。大いに刺激を受けました。

カンボジアで見たものはどれもこれも刺激的でした。孤児院の子供たち、自給自足の農村生活、ゴミ山、ガタガタの道、四人乗りのバイク……。そんな生活がある中で、急成長を遂げる首都、プノンペン。日本のものと何ら遜色のないイオンモール、高い語学力の大学生、街中で見かけた多くの外国人。けれどそんな生活が必ずしも是と言えるかどうか

は疑問です。農村の人たちも、ゴミ山で暮らす人々も、彼らなりにたくましく生きていました。「幸せ」とは私たちが彼らに通じ一辺倒のものを押し付けるのではなく、彼らが様々なものを知っていくなかで、彼ら自身が選択していくものなのではないか。そう思いました。カンボジアは私が思っていたよりも大きな格差を孕みながら、成長している国でした。先進国の「道具」にされず、彼らにとって良い成長ができるよう・・・都市部でも農村部でも外国人である私たちに優しく、人柄が本当に素敵だったカンボジアの人たちを思い出しては、そう思わずにはいられません。

今回の旅では本当に多くのものを見、体験することができました。自分にできることは小さいですが、これからも考え、また「行動すること」で、何か人に影響を与えられるようになりたい、そう思わせてくれた12日間でした。いろんなことを教えてくれた研修先の方たち、ガイドのホンさん、引率して下さったアキさん、メンバーの皆には感謝です。ありがとうございました。

カンボジアの社会問題を考えて

同志社大学 法学部 政治学科 3 年生 第三陣

私は JAPF のスタディツアーに参加して、今まで教科書に数行しか載っていなかった歴史的事実について肌で実感することができました。

そして様々な人のお話をきいて、問題の根深さや各人の社会像、問題と向き合う姿勢など、人の人生観についても触れる貴重な体験となりました。

この旅で一番実感したのは「自分の頭で考える」ということの重要性です。私たちは普段受け身の授業になれてしまっていて、思考停止していないでしょうか。情報を鵜呑みにし、点数を取るための勉強しかしなくなっていないでしょうか。

けれど今回の旅で、それでは自分をだめにしてしまうと本当に思いました。

どんな問題も他人任せにせず、自分のこととして受け止めて、自分の考えをもつ。相手の意見を理解し、共通点や相違点からさらに考えを深めて行くこと。

頭で考え、評価し、できる限り疑問をぶつけて理解を深めることが自分の発展につながると強く感じました。

旅の初めは研修先でうまく質問できず、お話をきくので精一杯でしたが、だんだんお話を聞きながら疑問を頭に浮かべることができるようになりました。同じような変化は周りの参加者にも起こっていて、研修の内容やディスカッションの質はどんどん向上していききました。

私たちは研修とディスカッションを通して、問題の原因は複数あるからこそ解決し難い「問題」なのであるとの認識にいたりました。そして最終的に問題を解決するために、いくつもある手近な課題から片付けていかなければ、問題の解決にたどり着かないのだという結論になりました。

たしかにカンボジアの抱える社会問題は非常に複雑です。貧困、格差が教育の不備や脆弱な産業、公務員の汚職問題、ゴミ山、孤児、地雷へと派生して一見なにかからてをつけたらよいかわかりません。しかし「手近なことからコツコツ」とやるしかないので。そうし続けていれば、「いつか花が咲く」と思うと CIESF の方もおっしゃっていました。わたしもそれが 50 年後か 100 年後かわからないけれど、カンボジアの方や NGO でがんばってらっしゃる方々の努力が報われると信じています。そのためにも一人一人がしっかりと自分のこととして捉え、自分の意見を主張できるようになることが、国を幸せな方に導く大切な要素なのだと私は思います。

カンボジアという国

恵泉女学園大学 国際社会学科 3年生 第三陣

私は今大学三年生で、国際社会を専攻している。私が今回、JAPFのインターンに参加しようと思ったのは、大学の授業で勉強したカンボジアについて、自分の目で見てみたかったからである。同じアジアであるが、発展が遅れ、様々な問題を抱え、他国からの援助を受け、日本とは全く異なる国カンボジアを訪れ、この目で見てみたかった。

ベトナムからの国境を越えてバスに乗り、プノンペンに移動している途中、窓の外を眺めていたが、日本とは全く異なる光景に驚いた。大学の授業で勉強して知ってはいたが、足の無い人や小さな子供から物乞いを受けた時は、本当にショッキングで、断るのも心苦しかった。このように、知識として頭にあることと、実際に自分の目で見ることではこんなにも心にのしかかるものが違うのかと思った。

その中でも、最も心に深く刻まれたのはアウシュビッツ収容所とキリングフィールドである。ポルポトのことも内戦のことも少し知っていたが、それは私の中で、ただ歴史のひとつの出来事で、知識のひとつにすぎなかった。しかし、実際に訪れ、建物や写真を見たり、話を聞いたりすることで自分の中の出来事に対する認識が変わっていった。特に、キリングフィールドで殺された方たちの頭蓋骨が収容されているガラスケースの前で靴を脱ぎ、帽子をとり、花とお線香をあげ、手を合わせて頭を下げたときは、心が震え、自分自身の全身の毛が総立ちし、涙が出た。こんな感情は生まれて初めてで戸惑ったが、殺された方たちの頭蓋骨を目の前にして、歴史の重さを知り、心が引き裂かれるようだった。この時感じたことや、この心の震えは、一生忘れることはないだろう。そして、このたった30年前に起きた内戦のせいで、今だにカンボジアの発展が遅れていること、経済や教育の問題を自分の目で見て確かめることができた。

また、カンボジアでの出会いは私に多くのことを学ばせてくれて、自分自身を見つめ直すきっかけを与えてくれた。私がこのインターンで出会ったカンボジアの人々は、みんな笑顔が素敵で、仕事に一生懸命で、優しく、家族を大切にしていた。この国を良くしたい、それが自分の使命であるという人たちにもたくさん出会った。日本国民であるのに、自国に関心を持たず、人との関わりや家族関係さえも希薄化している私たちとは大きな差があると感じた。

私が、このインターンを通して自分自身に問いかけたいのは、「真の豊かさとはなにか」ということである。日本は戦後、高度経済成長期を経て発展し、先進国の仲間入りを果たし、国として大きく成功したと言える。今では街には高いビルが建ち並び、便利さを手に入れ、モノが溢れかえっている。一見、恵まれて豊かな国であるように見えるが、果たして本当に豊かな国と言えるのだろうか。私には、お金はないけれど、カンボジアで出会った人々の方が私たち日本人よりも豊かな面があると感じた。それは素直さだったり、暖かさだったり、一生懸命さだったり、カンボジアの人たちの人間性に触れ、今までの自分に

対する恥ずかしさが芽生えたり、自分自身を見つめ直すことができた。日本で生活してきていつの間にか構築されていった偏った考え方や価値観を変えるきっかけにもなった。帰国して改めて思うことは、この経験を通して、自分自身、本当の意味で心が豊かな人間になりたいということである。自分の人生に大きな影響と、経験を与えてくれたこのインターンに改めて感謝したい。